

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第113集

東 端 城 跡  
御 船 城 跡  
矢 並 下 本 城 跡

2002

財団法人愛知県教育サービスセンター

愛 知 県 埋 蔵 文 化 財 セ ン タ ー

# 東端城跡



## 東端城跡

## 例 言

- 1 東端城跡は（遺跡番号 5442994）は安城市東端町中縄手に所在する遺跡である。
- 2 本書は、愛知県建設部道路維持課が行う緊急地方道整備事業自転車歩行者道路設置工事（安城碧南線）に伴う事前調査の発掘調査報告書である。発掘調査は県建設部から愛知県教育委員会を通じて委託を受けた財団法人愛知県教育サービスセンター 愛知県埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 発掘調査は、平成 13 年 10 月～11 月にかけて 800 m<sup>2</sup>の面積で行われ、竹内睦・宮腰健司・武井繁樹が担当した。
- 4 発掘調査に引き続き、平成 14 年度に報告書作成のための整理事業を実施した。整理作業は宮腰健司担当した。
- 5 調査にあたっては本センター理事・専門員をはじめ次の各関係機関のご指導とご協力を得た。愛知県教育委員会文化財保護室、愛知県埋蔵文化財調査センター、安城市教育委員会、愛知県建設部道路維持課
- 6 調査区の座標は、国土交通省告示に定められた平面直角座標Ⅶ系に準拠したが、旧基準の「日本測地系」で表記している。
- 7 遺構は以下のアルファベットによる分類記号と、各調査区毎で調査時に使用した表記をそのまま使用した。  
S K：土坑、S D：溝、S X：その他の遺構、
- 8 本書の執筆は第 5 章自然科学分析を黒澤一男（パレオ・ラボ）が、他は宮腰健司が行っている。
- 9 本遺跡の調査にあたり、次の各氏のご指導・ご協力を得た（敬称略）。  
岡安雅彦・鈴木とよ江・川崎みどり・斉藤弘之・立松彰・永井伸明・中野晴久・丸山竜平
- 10 発掘調査については発掘調査補助員である中川文恵、整理全般については調査研究補助員である小嶋そのみの他、多数の発掘作業員・整理作業員・整理補助員の皆様のご協力を得た。記して感謝する次第である。
- 11 遺跡の現況測量図については、安城市所有の図面を借用し掲載した。
- 12 調査記録（図面・写真資料・日誌等）は、愛知県埋蔵文化財調査センターにて保管・管理している。

# 東端城跡目次

例言  
目次

|                     |    |
|---------------------|----|
| 第1章 調査と遺跡の概要        | 1  |
| 第2章 遺構              |    |
| 第1節 土塁              | 4  |
| 第2節 堀               | 4  |
| 第3節 溝               | 8  |
| 第4節 土坑              | 10 |
| 第5節 不明遺構            | 11 |
| 第3章                 |    |
| 第1節 遺構内出土の遺物        | 12 |
| 第2節 遺構外出土の遺物        | 21 |
| 第3節 土製品・石製品・金属製品    | 22 |
| 第4章 自然科学分析          |    |
| 第1節 東端城跡 SX01 出土の貝類 | 23 |
| 第5章 まとめ             | 28 |

[遺構図版](#)  
[写真図版](#)



## 東端城跡

## 挿図・挿写真目次

- 第1図 調査区位置図
- 第2図 東端城と周辺の遺跡
- 第3図 上層で検出された遺構
- 第4図 西壁セクション1図
- 第5図 西壁セクション2図
- 第6図 東土塁セクション図
- 第7図 西土塁・堀（SD23）セクション図
- 第8図 SD16セクション図
- 第9図 SX01セクション図
- 第10図 SD16出土土器（1）
- 第11図 SD16出土土器（2）
- 第12図 SX01出土土器（1）
- 第13図 SX01（2）・SD22出土土器（1）
- 第14図 遺構内出土土器（1）
- 第15図 遺構内（2）・遺構外出土土器
- 第16図 遺構外出土土器・土製品
- 第17図 石製品・金属製品
- 第18図 東端城跡におけるアサリの殻長サイズ
- 第19図 塩竈想定図
- 第20図 東端城想定復元図
- 第21図 縄文土器分布図
- 第22図 支脚状土製品分布図
- 第23図 土師質土器分布図
- 第24図 内耳鍋分布図
- 第25図 陶磁器分布図
- 写真1 出土貝類

## 表目次

- 表1 東端城跡の出土貝類種名
- 表2 東端城跡における貝類種出土量
- 表3 SD16・SX01出土破片数

## 写真図版目次

## 写真図版1

- 西土塁・堀（SD23）西壁セクション（南から）
- 堀（SD23）西壁セクション（南東から）
- 西土塁西壁セクション（東から）
- 東土塁A－Bセクション（西から）
- SD16 I－Jセクション（西から）

## 写真図版2

- 東端城跡空中写真

## 写真図版3

- 調査前風景・東土塁（北から）
- 調査前風景・西土塁（西から）
- 調査前風景・調査区（南西から）
- 調査前風景・郭内（南東から）
- 調査区全景・北東（南西から）

## 写真図版4

- 調査区全景・南西（北東から）
- 西土塁付近（北東から）
- 西土塁・SD01（東から）
- 東土塁（北から）
- 東土塁（南西から）

## 写真図版5

- 堀（SD23）・中央部（西から）
- 東土塁付近（北西から）
- SX01 付近（北から）
- 東土塁（南から）
- SK32 断ち割り（北西から）

## 写真図版6

- SX01・SD22（北から）
- SX01 貝層検出状況（南西から）
- SX01・SD22（北西から）
- SD22 鍋（54）出土状態（南から）
- SD22 鍋（54）出土状態（西から）

## 写真図版7

- 西土塁C－Dセクション（東から）
- 西土塁・堀（SD23）西壁セクション（東から）
- 西土塁北壁セクション（東から）
- 西土塁・堀（SD23）西壁セクション（南から）
- 西土塁西壁セクション（東から）

## 写真図版8

- 堀（SD23）E－Fセクション（南東から）
- 堀（SD23）の西・腰曲輪部分西壁セクション（南東から）
- SD16・SD14 西壁セクション（東から）
- SD16・SD15 G－Hセクション（西から）
- 東土塁A－Bセクション（北から）

## 写真図版9 遺物写真

## 写真図版10 遺物写真

## 写真図版11 遺物写真

## 写真図版12 遺物写真

# 第 1 章 調査と遺跡の概要

## 1 調査の経緯

今回の東端城跡の調査は、緊急地方整備事業自転車歩行者道路設置工事に伴う事前調査として、愛知県建設部道路維持課から愛知県教育委員会を通じた委託事業として行ったものである。調査面積は800 m<sup>2</sup>で、調査期間は平成13年10月から11月にかけてである。また、その後、平成14年度に整理作業を行った。

## 2 調査の概要

調査地点は、城の規模は約70×70 mを測り、現状では三方に土塁が巡り隅丸方形・台形の平面形態をしている東端城跡の南東部分の一辺に沿った場所になる。

遺跡の現況は、高さ約1.2 mの土塁が郭周辺を巡り、北東に車などの進入路、南西と北に通路によって途切れてはいるが、良好な状態で遺存していた。この途切れ部については虎口の可能性があり、そこから内側の郭内は耕作地と駐車場所になっており、土塁沿いに溝が掘られている。土塁外側については、西から北の「城址稻荷」付近にかけては帯曲輪が巡り、さらにその外側は田及び湿地になっている。南側は碧海台地の段丘となり、低地部との比高は3～4 mを測る。東側は、北東に所在する念空寺との間を、堀切状に比高1～2 mで道路が走っている。

調査は、まず重機で表土部分と土塁の内側を巡る溝（SD01・02）の上部部分を掘削した。さらにこの時点で、葡萄畑になっていた時に設けられた多くの補強ワイヤーの土台も除去している。次に、固い面として認識された、黄褐色砂ブロックを含む明赤褐色砂が堆積している層の上面を、上層として最初の検出を行い、部分的には2面にわたって遺構を確認している。さらに10～20 cmを人力で掘り下げて、基盤である明赤褐色砂面でSD16・SD23・SX01などの遺構を確認している。土塁は、上部の堆積がほとんどみられなかったため、表土部分を人力で除去し、その後断ち割りをを行っている。また土塁の盛土については、重機で除去し、下位の遺構の確認をおこなった。

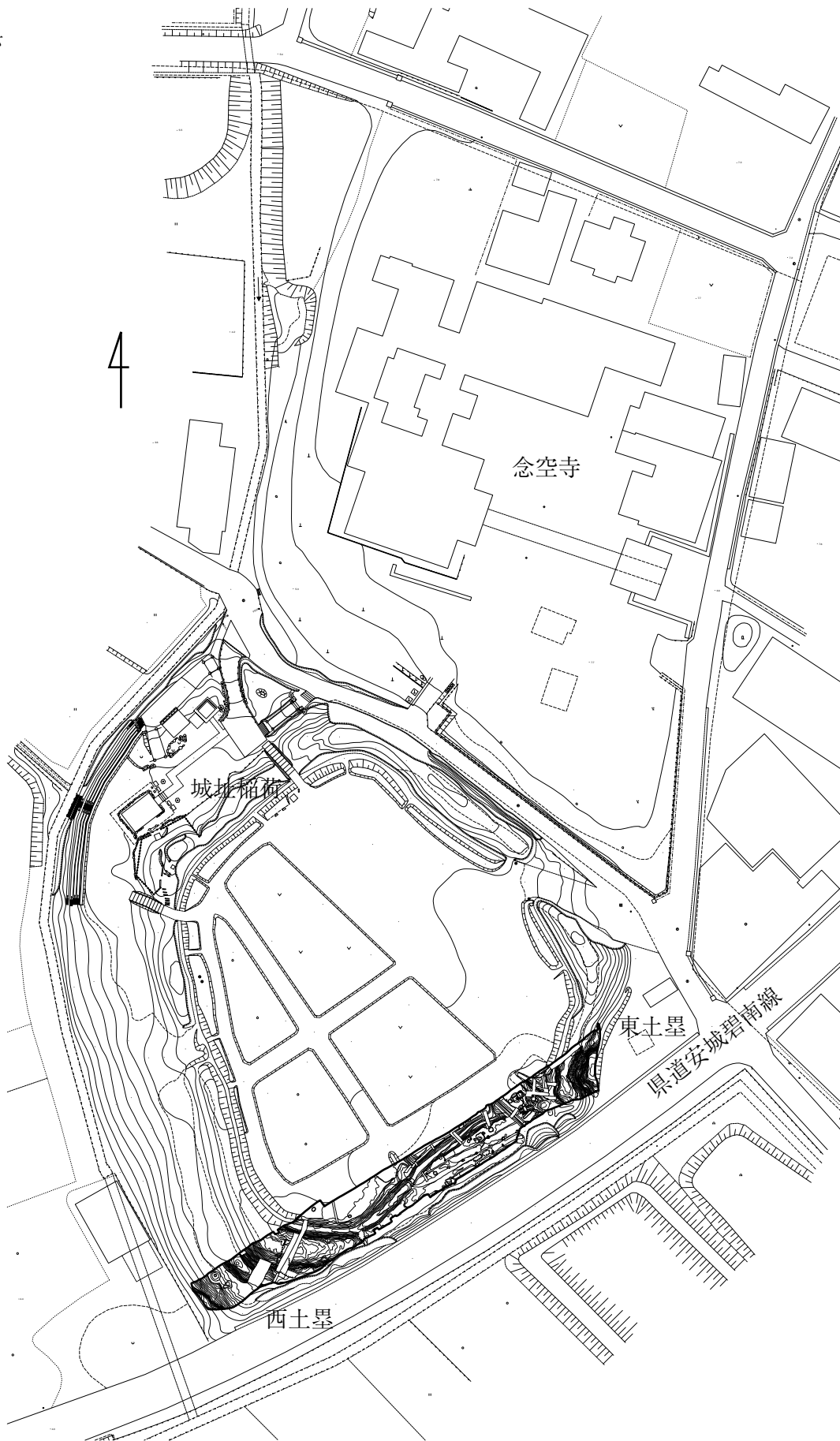
## 3 遺跡の概要

遺跡は、北東から南西に延びる碧海台地の南西端にある、東西を開析谷によって隔てられた半島状の台地上に築かれており、北西約650 mのところには油ヶ淵が広がっている。

東端城は1580年（天正8年）、大浜羽城（碧南市）の長田地重元が息子の尚勝に築かせたとされており、その後長久手の戦い（1584年（天正12年））で活躍した弟の永井伝八郎直勝に与えられ、1616年（元和2年）に常陸国笠間城に転封するまで、営まれていたと考えられている。

周辺の遺跡としては、近世の陣屋である根崎陣屋や西端陣屋が碧海台地の縁辺部に沿って所在しており、開析谷を挟んだ南東側には東端古屋敷として伝えられる地点が存在する。さらに周辺には、中根山貝塚や南山貝塚など縄文時代から近世にかけての貝塚遺跡が多数点在している。

東端城跡

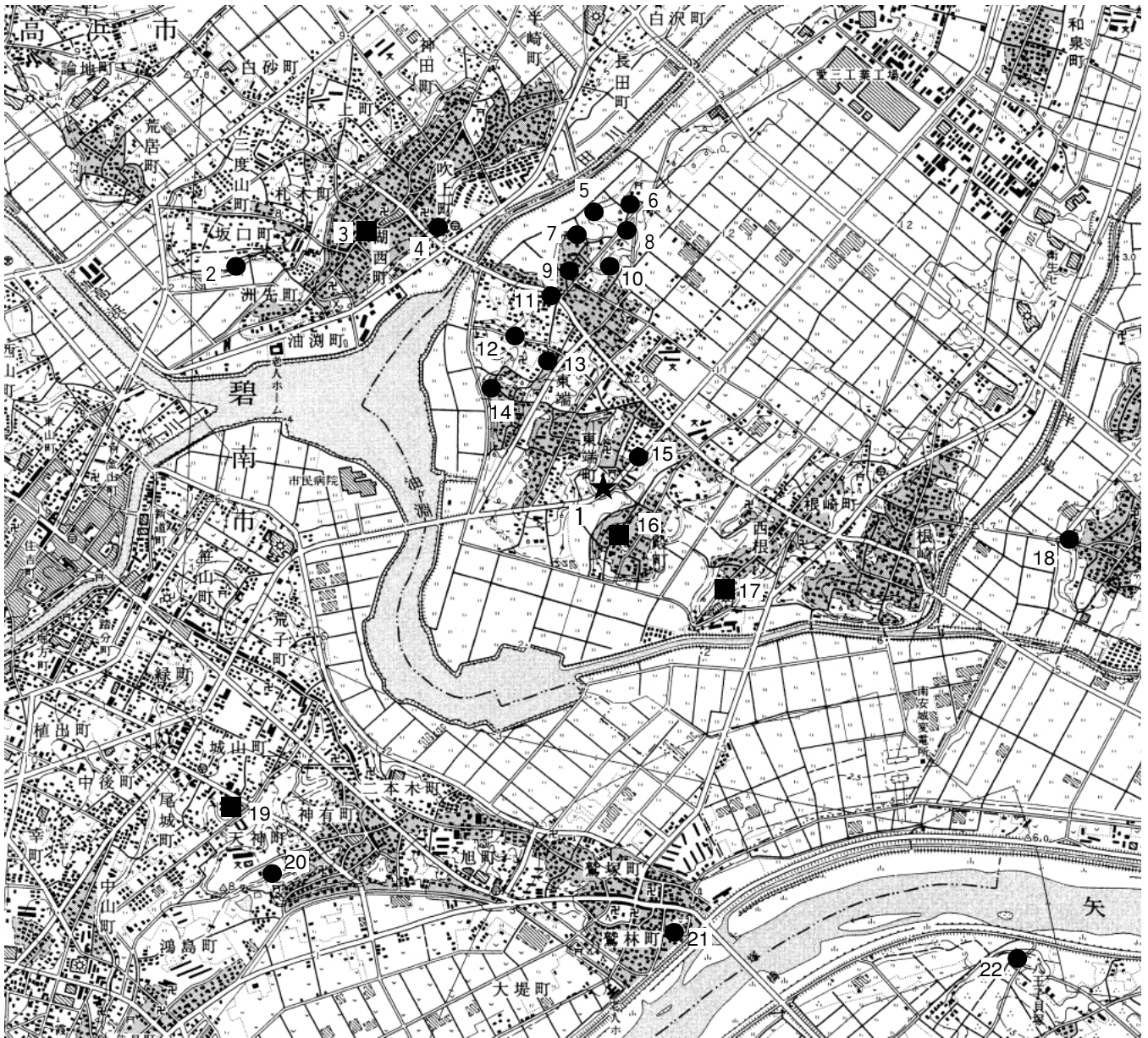


第1図 調査区位置図 (S=1/1000)

\* 現況測量図については安城市作成の図面を使用



## 東端城跡



第2図 東端城と周辺の遺跡 (S=1/25,000)

- |         |         |          |          |         |         |
|---------|---------|----------|----------|---------|---------|
| 1 東端城跡  | 2 坊領貝塚  | 3 西端陣屋   | 4 吹上貝塚   | 5 小山貝塚  | 6 東端貝塚  |
| 7 西蓮寺貝塚 | 8 小山東貝塚 | 9 寺下貝塚   | 10 八剣貝塚  | 11 天白貝塚 | 12 道城貝塚 |
| 13 貝戸貝塚 | 14 南山貝塚 | 15 中根山貝塚 | 16 東端古屋敷 | 17 根崎陣屋 | 18 城畠貝塚 |
| 19 鷺塚城  | 20 神有貝塚 | 21 荒井貝塚  | 22 八王子貝塚 |         |         |

## 第2章 遺構

### 第1節 土塁

#### 1 東土塁

東土塁は、上端幅約1.5m・下端幅約3.9m、高さが内郭から約1.3m・外道路面から約3mを測る。土塁の全面は大きな攪乱もなく、表土・腐植土を除去すると、遺存している盛土が検出できる状況であった。また東側面に関しては、削平されているようで、抉れた状態となっており、底面部分も現代の攪乱が激しく堀等の施設の存在は確認されていない。また西側も後世の溝SD02によって裾部が削られている。

郭東を北西―南東方向に走る東土塁は、現在の車両進入路部分南東1m程のところで方向を変え、南北からやや東に振れた方向になる。この南に延びた土塁は、調査区内ではさらに方向が変わり、南東方向に曲がっていく。

土塁の構築は、東に落ちる斜面肩に破碎礫を多く含む地山砂を敷き平坦面を作り出した後、その上に郭側から破碎礫を含む地山砂を20～80cmの厚さで積み重ねている。ただ、明瞭な異質層や版築面などは確認されなかった。

#### 2 西土塁

西土塁は、上端幅約4m・下端幅約6m、高さが内郭から約1.6m・堀（SD23）底面から約4mを測る。調査区中央部では、表面観察上は破壊前の状態と変わらないように埋め戻された部分以外の土塁の全面は大きな攪乱もなく、表土・腐植土を除去すると、遺存している盛土が検出できる状況であった。土塁の西側は堀（SD23）に落ち込んでいき、東側は東土塁同様、後世の溝SD01によって裾部が削られている。

郭西をほぼ南北に走る西土塁は、調査区内で東に向きを変え、東西からやや北に振れた軸線をとるようになる。

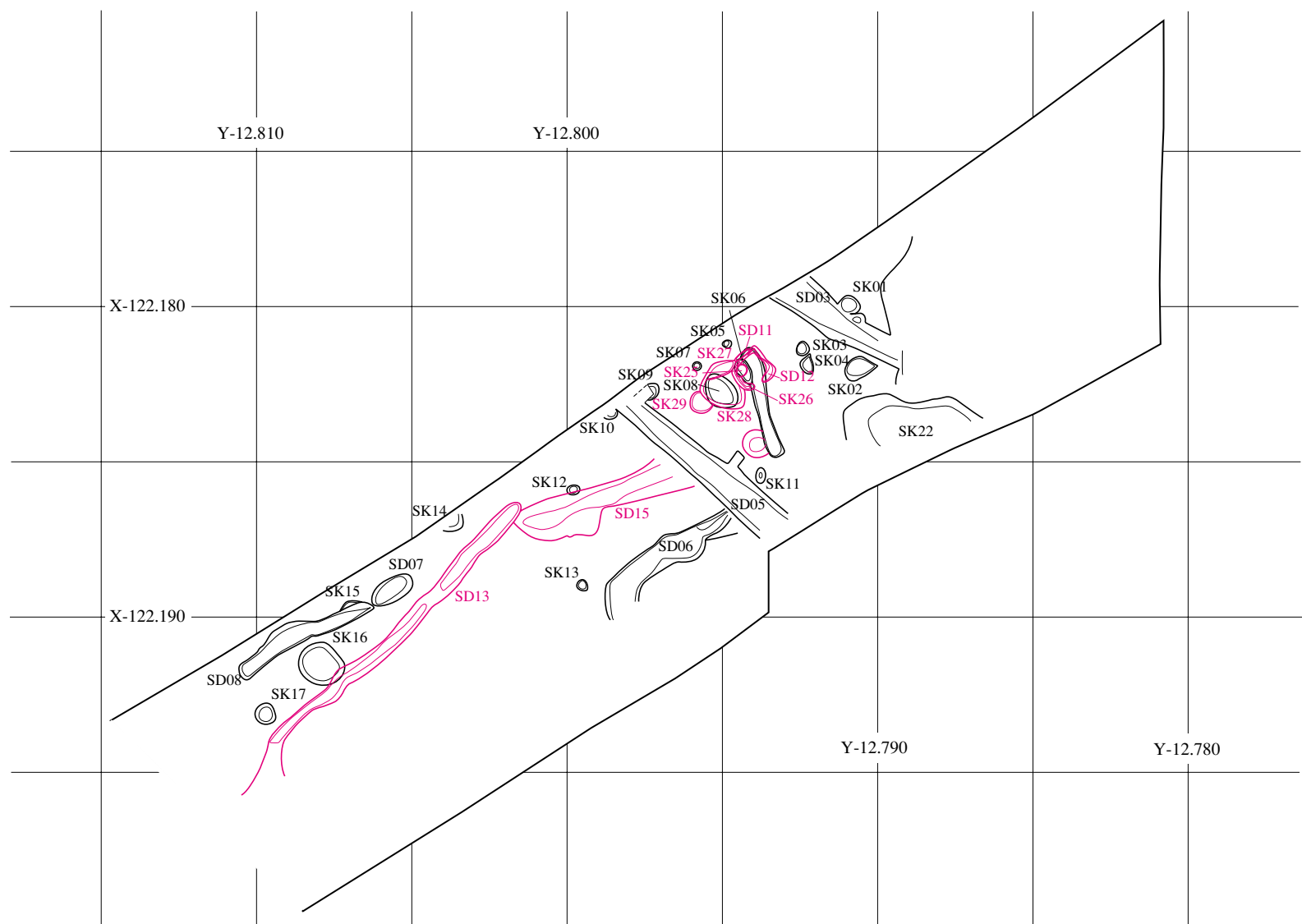
土塁の構築は、盛土予定地を平坦に均した後、郭外から破碎礫を含んだ地山砂を20～50cmの厚さで積み重ねている。ただ土塁の北側においてのみ、平坦面地直上のやや凹んだ部分に、他の地山土とは異質な浅黄色の細砂層がみられた。

### 第2節 堀

#### 1 SD23

西土塁の西で、郭の外側になる地点において、幅約4.3m・深さ約1.4mを測り、断面が逆台形を呈する堀が確認された。土塁に接する側の角度は、堀部分で約50度、土塁部分で約30度となる。SD23は西土塁に沿って北西から東方向に走るが、東側で次第に浅くなっており、E―Fセクション部分で約90cmとなる。さらに東側部分は樹木のため調査が困難であったが、部分的に確認したところによると地山面付近まで底面が上がってきており、東に側で収束すると考えられた。

掘削時には明瞭に区別できなかったが、堀のセクションの観察では中層以上には掘り直したような痕跡があり、中層から出土した磁器の碗の口縁部分の所属時期である、17世紀代までは凹地状の痕跡が認められていたと推定される。

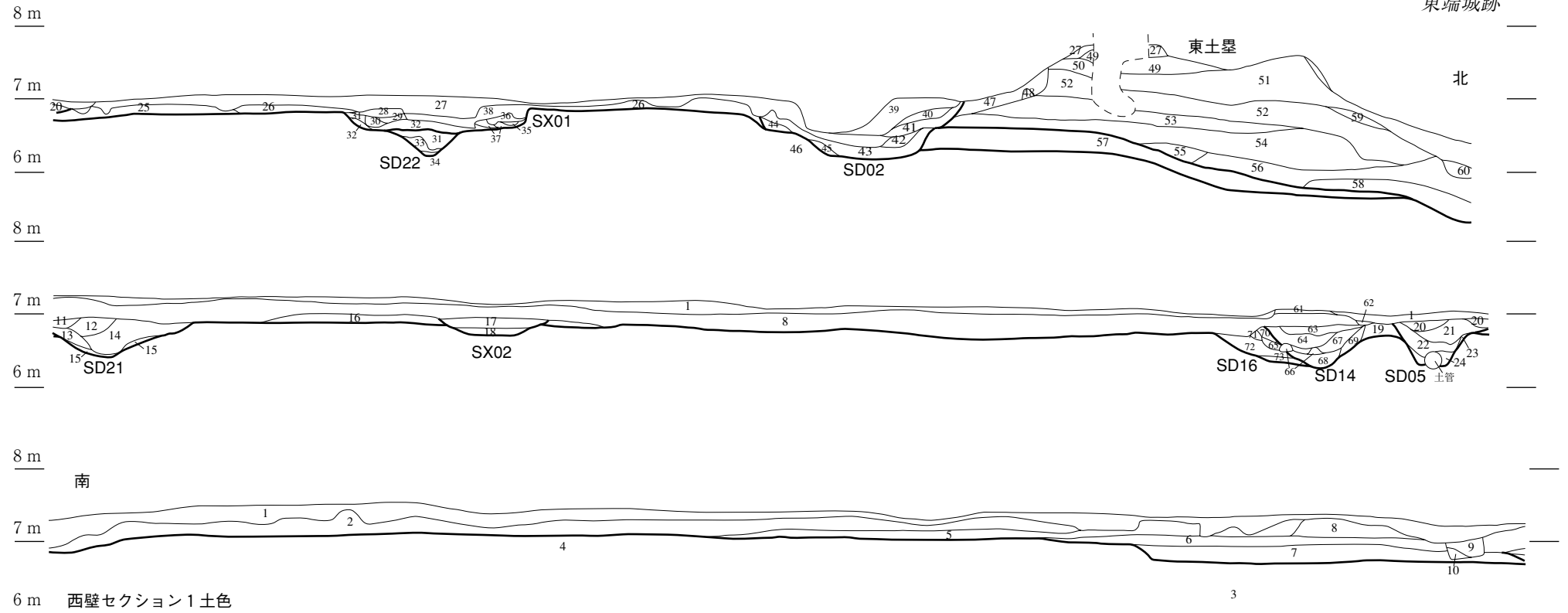


第3図 上層で検出された遺構 (S=1/200)

※赤色線は上層下位で検出された遺構



東端城跡



## 西壁セクション1土色

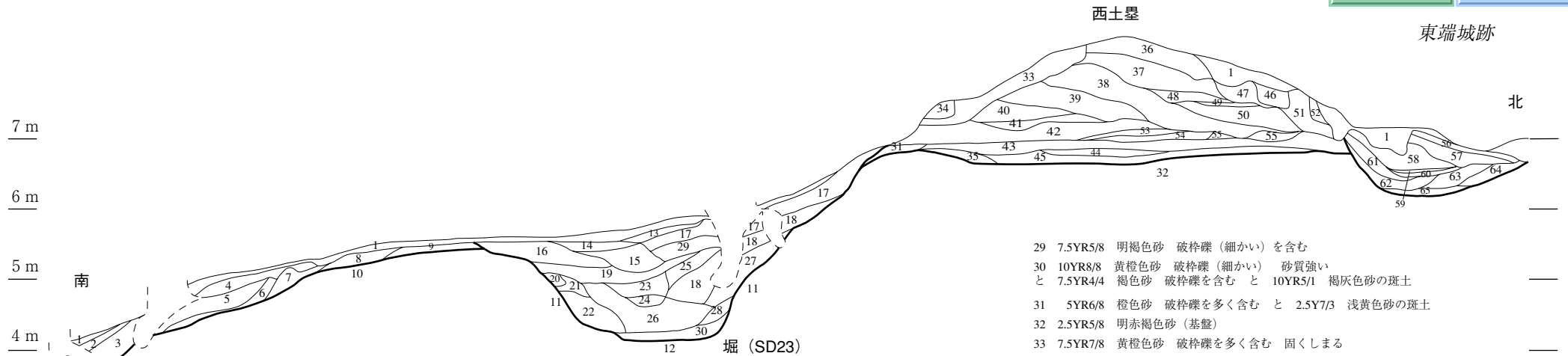
- 1 10YR5/2 灰黄褐色砂 破砕礫を含むと  
SB5/1 暗青灰色砂 破砕礫を含む
- 2 10YR6/4 にぶい黄橙色砂 砂質強い しまっていない
- 3 2.5YR5/8 明赤褐色砂 にぶい黄橙色砂ブロック含む
- 4 2.5YR5/8 明赤褐色砂 (基盤)
- 5 10YR5/3 にぶい黄褐色砂 破砕礫少量含む しまっていない
- 6 10YR4/3 にぶい黄褐色砂 破砕礫少量含む
- 7 10YR4/3 にぶい黄褐色砂 破砕礫少量含むと  
2.5YR5/8 明赤褐色砂 ブロックを含む
- 8 10YR6/3 にぶい黄褐色砂 破砕礫を多く含む
- 9 10YR4/1 褐灰色砂
- 10 10YR4/1 褐灰色砂と  
10YR4/3 にぶい黄褐色砂 破砕礫少量含む の斑土
- 11 10YR7/4 にぶい黄褐色砂 と  
2.5YR5/8 明赤褐色砂 ブロックをわずかに含む
- 12 10YR7/4 にぶい黄褐色砂 と  
2.5YR5/8 明赤褐色砂 ブロックを多く含む
- 13 10YR6/4 にぶい黄褐色砂
- 14 10YR7/4 にぶい黄褐色砂
- 15 10YR5/3 にぶい黄褐色砂
- 16 10YR4/3 にぶい黄褐色砂 破砕礫少量含む と  
2.5YR5/8 明赤褐色砂 ブロックを含む
- 17 10YR3/3 暗褐色砂と2.5YR5/8 明赤褐色砂の斑土
- 18 10YR3/3 暗褐色砂と2.5YR5/8 明赤褐色砂 ブロックを含む 炭化物

- 19 5YR5/6 明赤褐色砂とSB5/1 青灰色砂 ブロックを含む 破砕礫を含む
- 20 5PB3/1 暗青灰色砂
- 21 10YR3/2 黒褐色砂
- 22 10YR3/2 黒褐色砂と10YR7/8 黄橙色砂の斑土
- 23 10YR7/8 黄橙色砂と10YR3/2 黒褐色砂 ブロックを含む
- 24 10YR3/2 黒褐色砂と10YR7/8 黄橙色砂 ブロックを多く含む
- 25 7.5YR6/4 にぶい橙色砂 破砕礫を多く含む
- 26 10YR6/4 にぶい黄褐色砂 破砕礫を多く含む
- 27 5PB4/1 暗青灰色砂
- 28 5YR4/4 にぶい赤褐色砂
- 29 5YR4/4 にぶい赤褐色砂 貝多く含む
- 30 5YR4/4 にぶい赤褐色砂 貝多く含む
- 31 5YR4/4 にぶい赤褐色砂と2.5YR5/8 明赤褐色砂の斑土
- 32 7.5YR5/6 明褐色砂と10YR7/8 黄橙色砂 ブロックを含む
- 33 7.5YR5/6 明褐色砂と2.5YR5/8明赤褐色砂 ブロックを含む
- 34 10YR5/2 灰黄褐色砂 破砕礫を多く含む
- 35 2.5YR5/6 明褐色砂
- 36 2.5YR5/6 明褐色砂 わずかに貝を含む
- 37 7.5YR4/4 褐色砂 貝を多く含む
- 38 10YR6/1 褐灰色砂 破砕礫を含む
- 39 10YR6/1 褐灰色砂と2.5YR5/8 明赤褐色砂 ブロックを含む

- 40 10YR6/1 褐灰色砂と10YR8/6 黄橙色砂の斑土
- 41 10YR6/1 褐灰色砂と10YR8/6 黄橙色砂 ブロックを含む
- 42 10YR6/1 褐灰色砂と10YR8/6 黄橙色砂 ブロックを含む
- 43 10YR6/1 褐灰色砂と10YR8/6 黄橙色砂 ブロックを多く含む
- 44 5YR4/4 にぶい赤褐色砂
- 45 10YR4/1 褐灰色砂ブロックを含む と  
10YR7/8 黄褐色砂 破砕礫を多く含む ブロックを含む
- 46 10YR7/8 黄褐色砂 破砕礫を多く含む (基盤)
- 47 5YR7/8 褐色砂 破砕礫を含む
- 48 5YR5/6 明赤褐色砂
- 49 5YR6/8 褐色砂 破砕礫を多く含む
- 50 5YR5/8 明赤褐色砂 破砕礫を含む
- 51 5YR5/8 明赤褐色砂 破砕礫を含む
- 52 5YR4/6 赤褐色砂 破砕礫を含む
- 53 5YR4/6 赤褐色砂 破砕礫を含む
- 54 10Y5/4 にぶい黄褐色砂 細砂
- 55 5YR5/6 明赤褐色砂 破砕礫を含む
- 56 5YR5/6 明赤褐色砂 破砕礫を多く含む
- 57 5YR4/8 赤褐色砂 破砕礫を含む
- 58 5YR4/4 にぶい赤褐色砂 破砕礫を含む
- 59 5YR5/6 明赤褐色砂

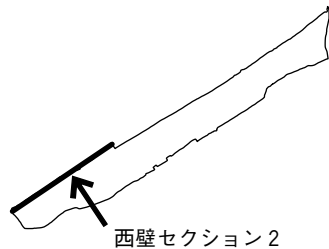
西壁セクション1

第4図 西壁セクション1図 (S=1/80)



## 西壁セクション1土色

- 60 7.5YR5/8 明褐色砂  
61 10YR6/3 にぶい黄褐色砂と5PB4/1 暗青灰色砂 ブロックを含む  
62 5YR5/4 にぶい赤褐色砂 破砕礫を含む  
63 5YR6/6 橙色砂と10YR6/3 にぶい黄褐色砂の斑土 破砕礫を含む  
64 10YR7/3 にぶい黄褐色砂 破砕礫を多く含む 砂質強い 粗砂  
65 10YR7/4 にぶい黄褐色砂 破砕礫を多く含む 粗砂  
66 10YR6/4 にぶい黄褐色砂 破砕礫を多く含む 粗砂  
67 5YR6/6 橙色砂と10YR6/3 にぶい黄褐色砂 の斑土 破砕礫多く含む  
68 7.5YR4/2 灰褐色砂 破砕礫をわずかに含む 炭化物  
69 5YR5/4 にぶい赤褐色砂 破砕礫を少量含む  
70 10YR6/3 にぶい黄褐色砂 破砕礫を多く含む  
71 10YR5/2 にぶい黄褐色砂と2.5YR5/6 明赤褐色砂  
ブロックをわずかに含む  
72 10YR5/6 明赤褐色砂と10YR5/3 にぶい黄褐色砂 の斑土  
73 7.5YR4/2 灰褐色砂と2.5YR5/6 明赤褐色砂 ブロックを含む



西壁セクション2

## 西壁セクション2土色

- 1 10YR5/1 褐灰色砂  
2 10YR4/3 にぶい黄褐色砂  
3 10YR5/6 黄褐色砂 やわらかい  
4 7.5YR5/6 明褐色砂 破砕礫を含む やわらかい  
5 10YR6/8 明黄褐色砂 やわらかい  
6 5YR5/8 明赤褐色砂 やわらかい  
7 5YR5/8 明赤褐色砂 やわらかい 破砕礫を多く含む  
8 5YR4/8 赤褐色砂と10YR6/8 明黄褐色砂 やや互層+破砕礫を多く含む  
9 5YR4/8 赤褐色砂と10YR6/8 明黄褐色砂 やや互層+破砕礫を多く含む  
10YR6/8 明黄褐色砂 多い  
10 5YR4/8 赤褐色砂 破砕礫を含む (基盤)  
11 7.5YR7/8 黄褐色砂 破砕礫を多く含む 互層状 (基盤)  
12 10YR8/8 黄褐色砂 破砕礫 (細かい) 砂質強い (基盤)  
13 10YR5/3 にぶい黄褐色砂  
14 10YR6/4 にぶい黄褐色砂  
15 10YR4/3 にぶい黄褐色砂 破砕礫多く含む  
16 10YR6/6 明黄褐色砂 破砕礫含む  
17 7.5YR6/6 橙色砂 破砕礫 (細かい) を含む  
18 5YR5/6 明赤褐色砂 破砕礫 (細かい) を含む  
19 7.5YR5/6 明褐色砂 破砕礫を含む  
20 7.5YR4/6 褐色砂  
21 7.5YR5/8 明褐色砂  
22 7.5YR5/4 にぶい褐色砂 破砕礫を含む  
23 7.5YR5/6 明褐色砂  
24 7.5YR5/6 明褐色砂 破砕礫を含む  
25 7.5YR6/8 橙色砂 破砕礫を含む  
26 7.5YR4/4 褐色砂 破砕礫を含む  
27 7.5YR5/6 明褐色砂 破砕礫 (細かい) を含む  
28 7.5YR6/8 褐色砂 破砕礫 (細かい) を含む

- 29 7.5YR5/8 明褐色砂 破砕礫 (細かい) を含む  
30 10YR8/8 黄褐色砂 破砕礫 (細かい) 砂質強い  
と 7.5YR4/4 褐色砂 破砕礫を含む と 10YR5/1 褐灰色砂の斑土  
31 5YR6/8 橙色砂 破砕礫を多く含む と 2.5Y7/3 浅黄色砂の斑土  
32 2.5YR5/8 明赤褐色砂 (基盤)  
33 7.5YR7/8 黄褐色砂 破砕礫を多く含む 固くしめる  
34 7.5YR7/6 褐色砂 破砕礫を多く含む  
35 2.5YR5/8 明赤褐色砂 と 2.5Y7/3 浅黄色砂 (細砂) ブロックを含む  
36 10YR8/8 黄褐色砂 破砕礫を含む やわらかい  
37 10YR7/8 黄褐色砂 破砕礫を多く含む やわらかい  
38 7.5YR5/6 明褐色砂 破砕礫を含む  
39 5YR6/8 褐色砂 破砕礫を少量含む  
40 5YR6/8 褐色砂 破砕礫を少量含む と 2.5Y7/3 浅黄色砂 ブロックを少量含む  
41 5YR6/8 褐色砂 破砕礫を少量含む と 2.5Y7/3 浅黄色砂 ブロックを含む  
42 5YR6/8 褐色砂 破砕礫を少量含む と 2.5Y7/3 浅黄色砂の斑土  
43 2.5Y7/3 浅黄色砂 (細砂)  
44 5YR6/8 褐色砂 破砕礫を少量含む  
と 2.5Y7/3 浅黄色砂 (細砂) ブロックを多く含む  
45 5YR5/8 明赤褐色砂と2.5Y7/3 浅黄色砂 (細砂) ブロックを含む  
46 10YR4/2 灰黄褐色砂  
47 10YR6/6 明黄褐色砂 やわらかい  
48 7.5YR5/6 明褐色砂 破砕礫を含む  
49 5YR4/6 赤褐色砂  
50 7.5YR5/6 明褐色砂 破砕礫を多く含む  
51 10YR5/6 黄褐色砂 破砕礫を多く含む やわらかい  
52 10YR7/6 明黄褐色砂 破砕礫を含む やわらかい  
53 5YR6/8 褐色砂 破砕礫を少量含む と 2.5Y7/3 浅黄色砂の斑土  
54 2.5Y7/3 浅黄色砂 (細砂) と 5YR6/8 褐色砂 ブロックを含む  
55 5YR6/8 褐色砂 破砕礫を少量含む と 2.5Y7/3 浅黄色砂の斑土  
56 10YR3/1 黒褐色砂と2.5YR5/8明赤褐色砂 ブロックを多く含む  
57 7.5YR6/8 褐色砂 破砕礫を含む と 10YR3/1黒褐色砂 ブロックを含む  
58 10YR4/1 褐灰色砂  
59 10YR4/1 褐灰色砂 植物を含む  
60 10YR4/1 褐灰色砂 植物を含む  
61 10YR5/1 褐灰色砂と7.5Y6/8褐色砂 ブロックを少量含む  
62 10YR4/2 灰褐色砂 破砕礫を含む  
63 10YR5/2 灰褐色砂  
64 10YR4/2 灰褐色砂 破砕礫を含む  
65 10YR5/2 灰褐色砂と2.5YR5/8明赤褐色砂の斑土

## 第5図 西壁セクション2図 (S=1/80)



東端城跡

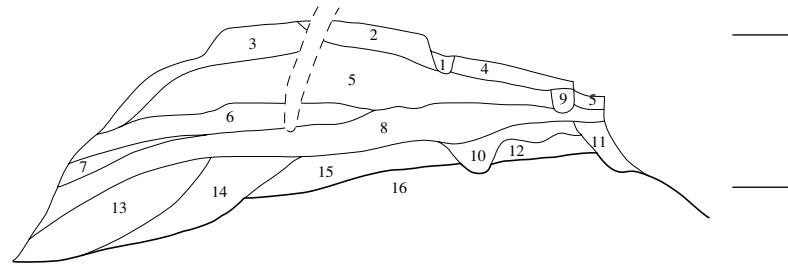
8 m

A

B

7 m

6 m



- 1 10YR5/1 褐灰色砂
- 2 10YR7/6 明黄褐色砂と2.5Y6/2 灰黄色砂と5YR6/6 橙色砂 の斑土
- 3 5YR5/6 明赤褐色砂と10YR7/6 明黄褐色砂 の斑土 破砕礫を含む
- 4 5YR6/8 橙色砂 破砕礫を含む
- 5 5YR5/6 明赤褐色砂 破砕礫を含む
- 6 2.5Y7/4 にぶい褐色砂 浅黄色砂 と5YR5/6 明赤褐色砂 ブロックを含む
- 7 5YR5/6 明赤褐色砂
- 8 2.5Y6/3 にぶい黄色砂
- 9 10YR5/1 褐灰色砂
- 10 5YR4/6 赤褐色砂 やや粘質 破砕礫を含む
- 11 10YR5/1 褐灰色砂 破砕礫を含む
- 12 5YR4/6 赤褐色砂と10YR7/8 黄橙色砂 の斑土 破砕礫を多く含む
- 13 5YR5/8 明赤褐色砂と2.5Y6/3 にぶい黄色砂 ブロックを含む
- 14 5YR5/8 明赤褐色砂 破砕礫を含む
- 15 5YR6/8 橙色砂 破砕礫を含む
- 16 10YR7/8 黄橙色砂 破砕礫を多く含む

第6図 東土塁セクション図 (S=1/50)

### 第3節 溝

#### 1 SD16

調査区中央部を北東から南西に、わずかにS字状をなして走る溝で、北東側で北に屈曲する。南西側はSD01に切られ不明となるが、土塁下には続いていかなことが判明している。規模は、幅約1.8m・深さ70cmを測り、断面がU字形を呈する。溝内に堆積している大部分の埋土は、地山土である明赤褐色砂と黄褐色砂の斑土で、溝廃絶後に埋められたと考えられる。溝内からは、多くの土師器片や、陶磁器片・支脚片が出土しており、量的なものでは16世紀の大塚期の遺物が圧倒的に多くなるが、最下層の3層から出土した黄瀬戸鉢(15・16)は17世紀前半のものになり、この遺物の所属時期以降に周辺の土を用いて埋められたと考えられる。

#### 2 SD01・02・03

郭内を土塁に沿って走る溝で、西土塁から東土塁までをSD01、西土塁に沿っている部分をSD02とした。両溝は一連のものとしてみることができ、調査開始時にも溝としてはっきり認識されている

#### 3 SD05

近代以降の土管を埋め込まれた溝となる。

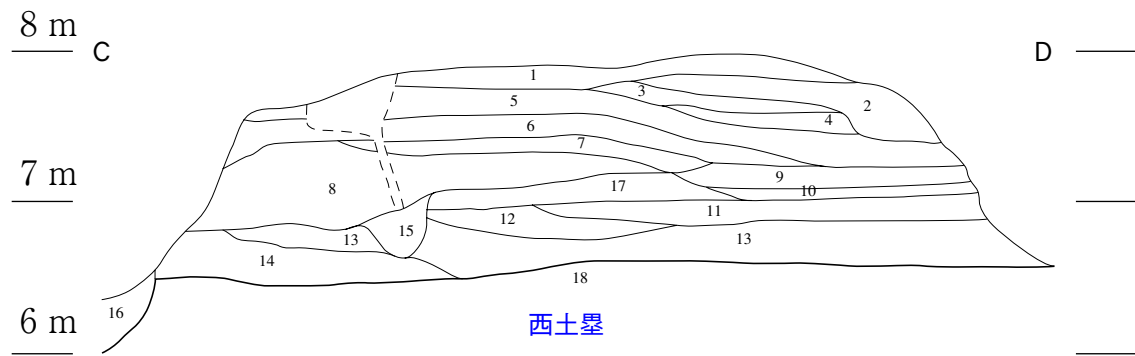
#### 4 SD13

上層の下位で検出されたもので、幅50cm・深さ13cmを測り、長さ11mにわたって確認され、南西端は不明瞭な形で収束している。時期は18世紀後半以降になる。

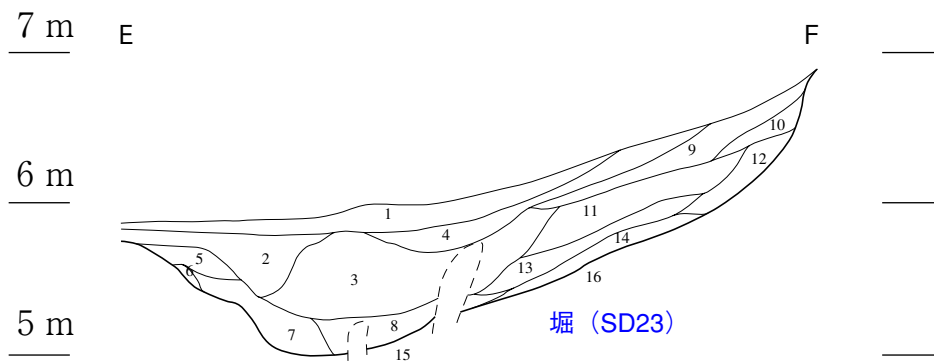
#### 5 SD14

SD16とほぼ重なるように走る溝でSD16を切り、SD15に切られている。大きさは幅1.2

東端城跡



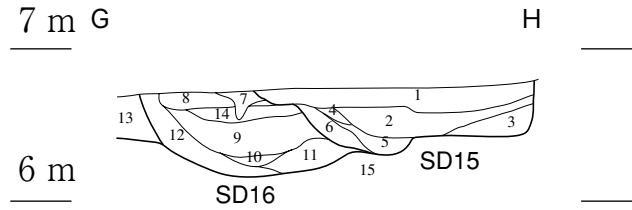
- 1 10YR6/8 橙色砂 破砕礫を含む  
 2 5YR6/8 橙色砂 破砕礫を含む  
 3 5YR6/8 橙色砂 破砕礫を含む と 2.5YR5/8 明赤褐色砂 ブロック含む  
 4 10YR6/8 橙色砂 破砕礫を多く含む  
 5 5YR5/8 明赤褐色砂 と 2.5YR6/2 灰黄色砂 細砂 ブロックを含む  
 6 5YR5/8 明赤褐色砂 と 2.5YR6/2 灰黄色砂 細砂 ブロックを含む  
 7 5YR5/8 明赤褐色砂 と 2.5YR6/2 灰黄色砂 細砂 の斑土  
 8 2.5YR6/2 灰黄色砂 細砂 と 5YR5/8 明赤褐色砂 ブロックを含む  
 9 2.5YR6/2 灰黄色砂 細砂  
 10 2.5YR6/2 灰黄色砂 細砂 と 5YR6/6 橙色砂 ブロックを少量含む  
 11 5YR6/6 橙色砂と2.5YR6/2 灰黄色砂 細砂 ブロックを含む  
 12 5YR6/6 橙色砂と2.5YR6/2 灰黄色砂 細砂 ブロックを多く含む  
 13 5YR6/6 橙色砂と2.5YR6/2 灰黄色砂 細砂 ブロックを含む  
 14 5YR6/6 橙色砂と2.5YR6/2 灰黄色砂 細砂 ブロックを含む の斑土 破砕礫を含む  
 15 5YR6/6 橙色砂と2.5YR6/2 灰黄色砂 細砂 ブロックを含む の斑土  
 16 10YR4/2 灰黄褐色砂  
 17 2.5YR6/2 灰黄色砂 細砂 と 5YR5/8 明赤褐色砂 ブロックを多く含む  
 18 10YR6/6 明黄褐色砂 破砕礫を多く含む (基盤)



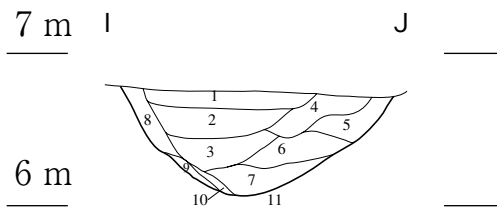
- 1 5YR5/4 にぶい赤褐色砂と10YR5/2 灰黄褐色砂 の斑土 破砕礫を多く含む しまっている  
 2 5YR4/6 赤褐色砂 破砕礫を含む  
 3 5YR4/6 赤褐色砂  
 4 5YR4/6 赤褐色砂 破砕礫を含む  
 5 5YR4/6 赤褐色砂  
 6 7.5YR5/4 にぶい褐色砂  
 7 5YR5/6 明赤褐色砂  
 8 5YR5/8 明赤褐色砂  
 9 7.5YR5/6 明褐色砂 破砕礫を多く含む  
 10 7.5YR5/6 明褐色砂  
 11 7.5YR5/6 明褐色砂 破砕礫を含む  
 12 7.5YR6/6 橙色砂 破砕礫を多く含む  
 13 5YR5/6 明赤褐色砂  
 14 5YR6/6 橙色砂 破砕礫を含む  
 15 10YR8/6 黄橙色砂 破砕礫を多く含む 砂状になる やわらかい (基盤)  
 16 10YR7/8 黄橙色砂 破砕礫を多く含む 固くしめる (基盤)

第7図 西土壘・堀 (SD23) セクション図 (S=1/50)

## 東端城跡



- 1 2.5YR5/6 明赤褐色砂と10YR5/3 にぶい黄褐色砂 の斑土 破砕礫を含む
- 2 2.5YR5/6 明赤褐色砂と10YR5/3 にぶい黄褐色砂 の斑土 10YR3/1 黒褐色砂 ベルト状に入る
- 3 2.5YR5/6 明赤褐色砂と10YR3/1 黒褐色砂 ベルト状に入る 10YR5/3 にぶい黄褐色砂 ブロック含む
- 4 10YR5/3 にぶい黄褐色砂
- 5 2.5YR5/6 明赤褐色砂と10YR5/3 にぶい黄褐色砂 の斑土
- 6 10YR5/3 にぶい黄褐色砂と2.5YR5/6 明赤褐色砂 ブロックをわずかに含む
- 7 10YR5/3 にぶい黄褐色砂と2.5YR5/6 明赤褐色砂 の斑土 破砕礫を含む
- 8 10YR8/8 黄橙色砂 破砕礫を含む と 2.5YR5/6 明赤褐色砂 の斑土
- 9 2.5YR5/6 明赤褐色砂と10YR7/6 明黄褐色砂 ブロックを含む やや粘質
- 10 10Y6/1 灰色砂と2.5YR5/6 明赤褐色砂 の斑土
- 11 10Y6/1 灰色砂と2.5YR5/6 明赤褐色砂 の斑土
- 12 10Y6/1 灰色砂 破砕礫を含む 砂質強い
- 13 2.5YR5/6 明赤褐色砂 破砕礫を含む
- 14 10YR8/8 黄橙色砂 破砕礫を含む と 2.5YR5/6 明赤褐色砂 の斑土 10YR8/8の方がやや多い
- 15 10YR8/8 黄橙色砂 破砕礫を含む



- 1 2.5YR5/6 明赤褐色砂と10YR5/3 にぶい黄褐色砂 の斑土 破砕礫を含む
- 2 2.5YR5/6 明赤褐色砂と10YR5/3 にぶい黄褐色砂 ブロックを含む 破砕礫を含む
- 3 2.5YR5/6 明赤褐色砂と10YR5/3 にぶい黄褐色砂 ブロックを含む
- 4 2.5YR5/6 明赤褐色砂と10YR5/3 にぶい黄褐色砂 の斑土 破砕礫を含む
- 5 2.5YR5/6 明赤褐色砂と10YR5/3 にぶい黄褐色砂 の斑土 破砕礫をわずかに含む
- 6 10YR5/3 にぶい黄褐色砂と2.5YR5/6 明赤褐色砂 ブロックをわずかに含む
- 7 10YR8/8 黄橙色砂と2.5YR5/6 明赤褐色砂と10Y6/1 灰色砂 互層 やや粘質
- 8 10Y6/1 灰色砂 破砕礫を含む
- 9 10Y6/1 灰色砂
- 10 10Y6/1 灰色砂 破砕礫を含む と 10YR8/8 黄橙色砂 の斑土
- 11 10YR8/8 黄橙色砂

第8図 SD16 セクション図 (S=1/50)

m・深さ50mを測り、時期は18世紀後半以降になる。

## 6 SD15・17

SD15は、SD13の北端部分と接するように始まり北東に延び、SD17はSD05を挟んで北東側に続いていく部分になる。上下面で検出されているが、同一の溝と思われ、幅70cm・深さが次第に深くなっていくSD17で40cmを測り、長さ9.8mにわたって検出されている。時期は17世紀後半以降になる。

## 7 SD22

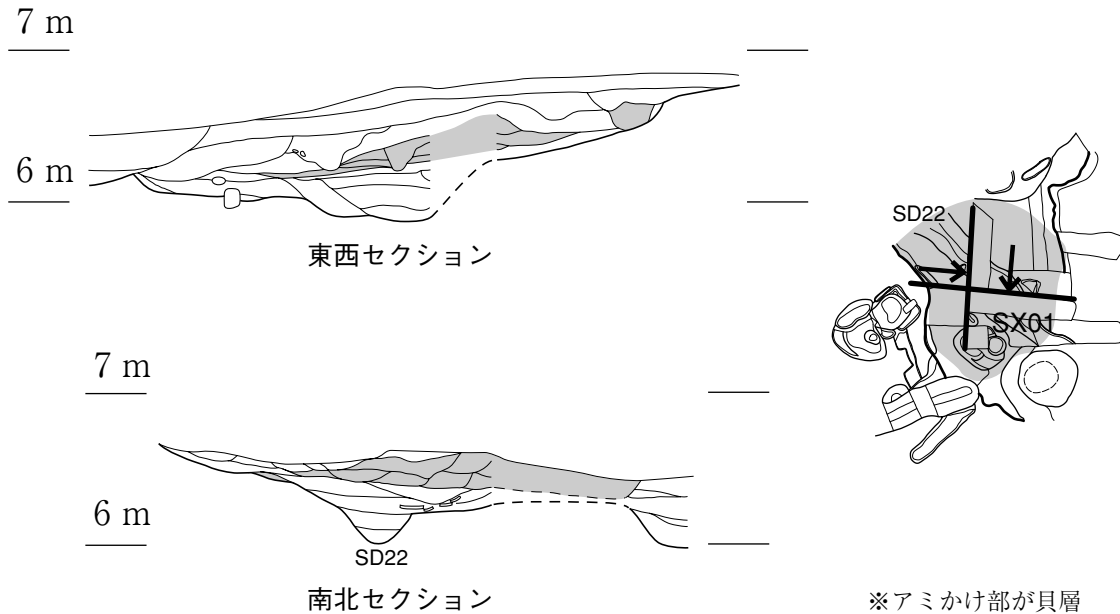
SX01の下位で検出された溝で、幅85cm・深さ20cmを測り、北西―南東方向に走っている。西溝肩部分より、内耳鍋(54)が破片の状態で出土している。

## 第4節 土坑

## 1 SX01

東土塁の西側で検出された、北西から南東に延びる溝状の不定形な落ち込みで、南東側はSD01に切られている。大きさは東西約2m・深さ70cmを測り、中位には貝を含む層が堆積していた。貝を含む層は混土貝層と認識できるもので、上下に地山土や地山の斑土が

東端城跡



第9図 SX01 セクション図 (S=1/50)

堆積している。貝層は、土嚢袋71袋分を分析し、その結果は「第4章自然科学分析」に詳しいが、アサリを主体として、ウミニナ・イボウミニナ・マガキ・オキシジミ・シオフキガイなどの貝が出土しており、哺乳類・鳥類・魚類の骨は確認されていない。貝を含む層はほぼまとまっており、長年にわたって多回数廃棄されたという状況ではなく、比較的短期間に堆積したものと考えられ、このことは、食材とした後に廃棄したのではなく、食材と選別した後に不要なものを捨てたものとされた分析の結果とも合致する。

遺物は、上位より上層－貝層－下層として取り上げ、貝層部分はさらに平面的な区分を加え、セクションベルトを挟んで北東－A・北西－B・南西－C・南東－D、として取り上げた。陶磁器類は破片が12点出土しているが、11点が上層出土となる。また土師質土器類は破片数524点出土しており、上層が約40%、貝層A区出土のものが約40%をしめ、下層からも15点(約3%)出土している。また支脚も10点出土し、うち6点が上層、3点が貝層、1点が下層から出土している。出土遺物のみからみた時期は、上層が江戸期以降、貝層以下が16世紀代になる。

## 2 SK32

東土塁の西側で検出された、径1.5mの円形を呈する土坑で、深さ約1mを測る。断ち割りの結果、最下部では径約80cmの円形に落ち込む部分が確認され、井戸枠もしくは水溜めの施設があったと推定された。時期は18世紀中葉以降のものになる。また上層で検出されたSK22は上層部分である可能性があったが、確認できなかった。

## 第5節 不明遺構

### 1 SX02・03・04

調査区の中央部で、SD06に切られる深さ20～30cmを測る不定形な落ち込みである。遺物はごく少量で、SX02から16世紀代の内耳鍋が出土している。

### 2 SX05

調査区中央部でSX01の北肩部分となっているもので、20m程にわたって幅1.2m・深さ40cmの部分を地山に破碎礫を混入した土で埋めている。時期は17世紀末以降になる。

## 第3章 遺物

### 第1節 遺構内出土の遺物

#### 1 SD16

SD16は、斑土ではない最下層部分を3層とし、上層の斑土部分を中間位で上下2層に分けて、上位より1層・2層として遺物を取り上げている。

陶磁器：4は出土層位不明、1～3が1層、5～11が2層、12～17が3層から出土している。

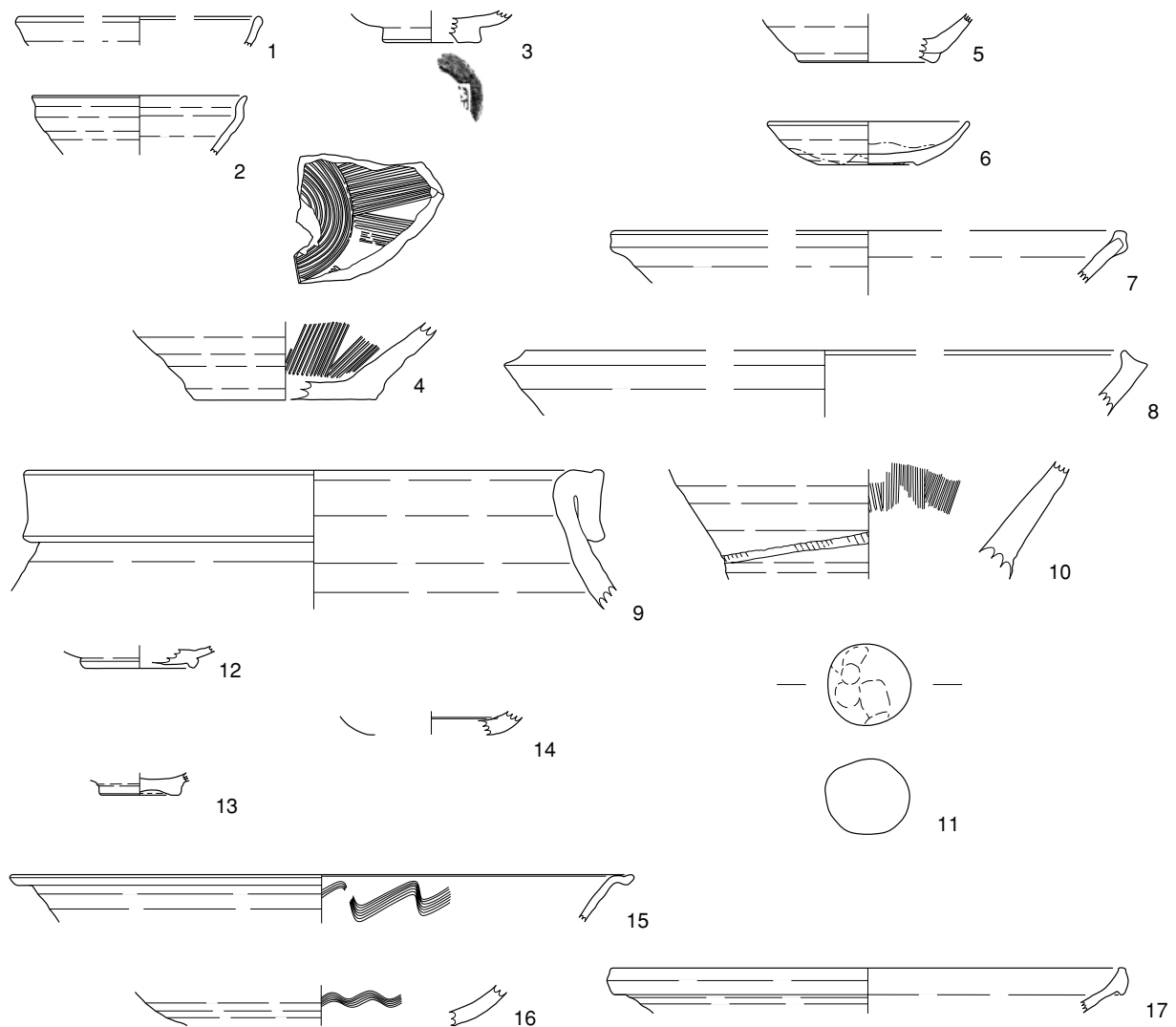
1は南部系の山茶碗の口縁部になり、内外面に自然釉が付着している。2は内外面に鉄釉がかかる天目茶碗で、口縁部が上方に延びて上外方向に屈曲する。時期は大窯第2段階になる。3は内面に灰釉、外面と高台部内面に鉄釉が施される腰鍔碗で、時期は18後半～19世紀になる。高台部底面には刻印がみられる。4は大窯期の播鉢で、内外面に鉄釉がかかる。5は南部系山茶碗の体部下半から高台部で、13世紀前半から中葉の南部系第6～7型式になる。6は大窯第2段階の皿で、鍔釉後に黒褐色の鉄釉がかけられている。底面には円形の重ね焼き痕が2カ所、高台部内面にはリング状に陶器片が付着する重ね焼き痕が見られる。7・8は播鉢の口縁部で、7は鍔釉、8は鉄釉が施されている。7は口縁端部外面が凹面となって上方に延びるもので、大窯第1段階になる。8は口縁端部は内外方向に拡張し、凹面をもつもので、鍔釉がかけられている。時期は16世紀代か。9は常滑産甕の口縁部で、折り返された口縁部が頸部に接触してやや凹面を作り、全体に自然釉が付着している。時期は16世紀前半になる。10は鉄釉がかかる大窯期の播鉢下半部になる。外面にある斜位の条痕状の沈線は、連続して直交するかすかな沈線が確認され、縄の痕跡であると考えられた。11はユビ押圧によって整形された陶丸で、自然釉が付着する。12は古代の灰釉陶器碗の高台部で、内面に灰釉、底部外面に回転糸切りがみられる。時期は10世紀後半～11世紀のH-72窯式になると思われる。13は天目茶碗の高台部で、外面と高台部内面に鍔釉、内面に黒褐色の鉄釉が施されている。14は青磁碗で、14～15世紀の龍泉窯産になると考えられる。15・16は口縁端部が横外方向に延び、6～7条の波状文が内面に施される黄瀬戸鉢になる。内外面ともやや剥落した灰釉がかけられており、16の内面には円形の緑色釉が1カ所みられる。時期は両者とも、17世紀前葉～中葉になる。17は、口縁端部がやや拡張されて膨らみながら上方に延びる鍔釉の播鉢口縁部で、大窯第2段階の後半期になる。

土師質鍋・釜：18は層位不明、19～21・26～28が1層、22～24・29・30が2層、25・31が3層から出土している。

18・19は口縁部が、外面にわずかな段をもち内湾する、内耳鍋になる。18は外面の有段部下に不明瞭な横位の沈線が巡り、ハケが施されている。20～25は半球形を呈する内耳鍋の口縁部と脚部(21)になる。25は口縁端部が内横方向に拡張されており、特徴的である。26も25と同様に口縁端部が拡張されており、羽付釜と思われる。27・29～31は羽付鍋、28は羽付内耳鍋になる。



東端城跡



第10図 SD16出土土器 (1) (S=1/4)

## 2 SX01

SX01は、貝層とその上下にある層から出土した遺物を、それぞれ上層・下層として取り上げた。ただ、下層からは少量の土師質土器・支脚片しか出土していない。

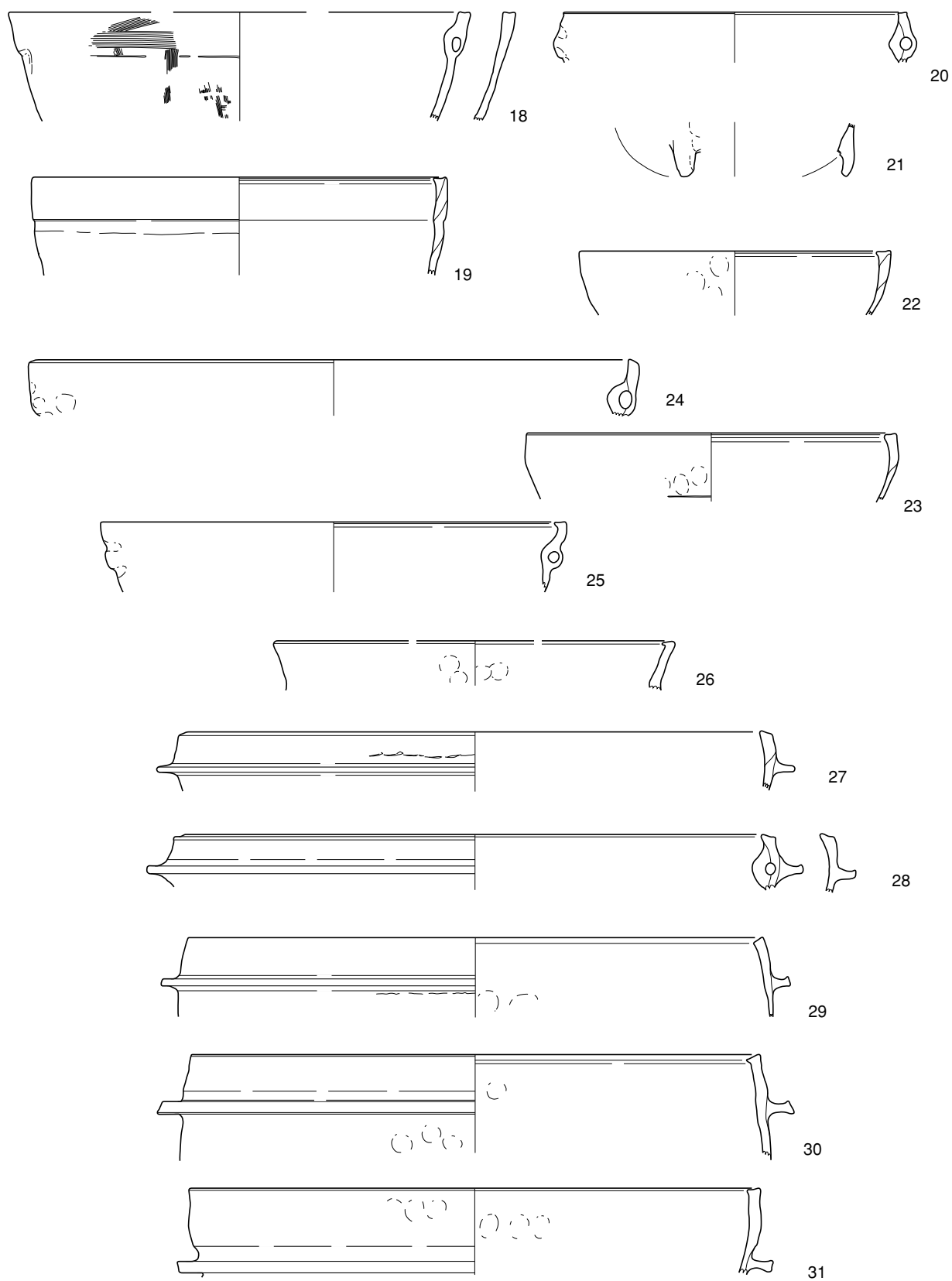
陶磁器 陶磁器類で図示できるものは32のみであった。32は、浅黄色の灰釉がかかる土瓶または皿の底部で削りだした断面三角形の低い高台部が付く。時期は18世紀以降になると思われ、混入遺物の可能性がある。

土師質鍋・釜・皿 33～41が上層、42～53が貝層から出土している。

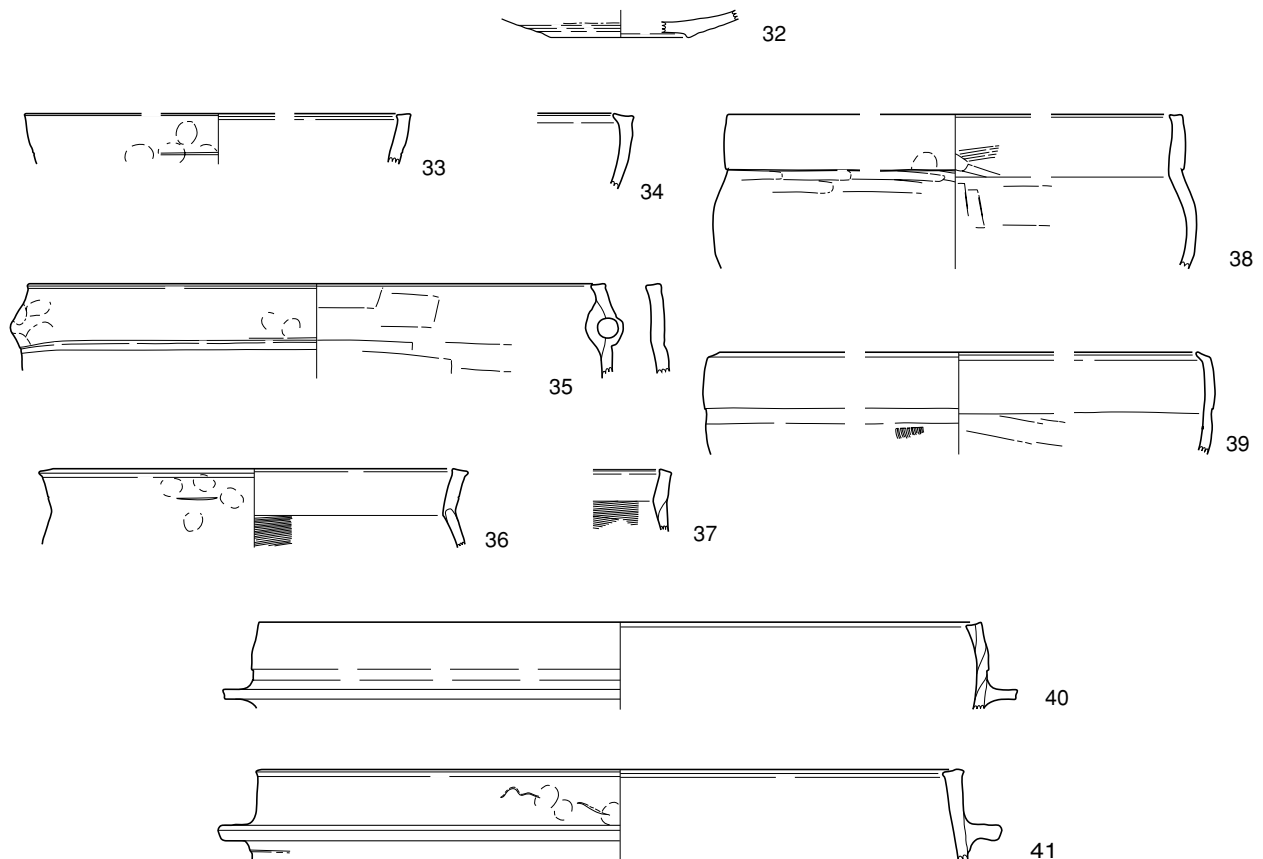
上層出土うち、33・34は半球形を呈するもの、35・38・39は有段の内湾する口縁部をもつもの、36・37はく字状に屈曲する口縁部をもつ内耳鍋になる。特に34・36の端部は内外両方向に、39は内方向に拡張されている。また、36・37の体部内面にはハケが施されている。40・41は羽付鍋の口縁部で、40はやや内湾し、41はやや内側に直線的に立ち上がる。

貝層出土のうち、42・43は半球形を呈するもの、44～47は有段の内湾する口縁部をもつ内耳鍋になる。このうち42の内面・44の口縁部内面・47の体部内面にはハケが施されてい

## 東端城跡



第11図 SD16出土土器(2) (S=1/4)



第12図 SX01 出土土器（1）（S=1/4）

る。また43は口径の小さな、小型の内耳鍋になる。48・49は底部になるもので、48の外面にはヘラケズリ・内面にはハケ、49はナデ調整されている。51～53は羽付鍋になる。50はヨコナデ及びナデ調整された皿になる。

### 3 SD22

54は溝肩部より破片の状態でもとまって出土した内耳鍋で、今回の調査中もっとも遺存状況が良好であったものである。体部は半球形を呈し、口縁端面はヨコナデにより内傾する凹面を形成する。外面中位から上半にかけてはユビ押圧及びユビナデ、下位にはヘラケズリ調整がなされ、内面中位から上半にかけては横位のハケ、下半はイタナデ調整されている。外面全体にススが、内面にはパッチ状になる有機物が付着している。また内面には、器面の剥離がみられる。

### 4 SD01

55～58・61は瀬戸・美濃産である。55の碗は、呉須による文様が描かれ、時期は19世紀前半～中葉になる。56は薄青の呉須による宝珠文が描かれており、19世紀以降のものになる。57は筒茶碗で、呉須による梅鉢・菊花繫文が描かれる。時期は19世紀前半～中葉。58は鉄釉が施された18世紀の蓋で、把手部が欠損している。59・60は瓦質の土器になる。59は火鉢の脚部で、時期は18世紀後半～19世紀、60は五徳の脚部で、時期は19世紀になる。60の脚は3本もしくは、2本単位で4本になると思われる。62・63は側辺・高台部が

## 東端城跡

打ち欠かれた加工円盤で、62は播鉢体部を、63は山茶碗高台部を使用している。61は錆釉が施された有段をなす播鉢口縁部で、時期は18世紀後半になる。

## 5 SD05

64は口縁端部が内面に丸く肥厚する播鉢で、鉄釉が施されている。瀬戸・美濃産で、時期は18世紀後半から19世紀初頭になる。

## 6 SD23

SD23は西土埜の外にある堀と思われる溝で、中層より白色の灰釉が施された磁器の碗口縁片65が出土している。小片であるため磁器の特定は難しいが、およそ17世紀代のものになると推定されている。

## 7 SD21

66は灰釉がかけられた瀬戸・美濃産の丸碗で、時期は18世紀代になる。

## 8 SD13

67は大窯第1及び2段階の灰釉皿になる。68は瀬戸・美濃産の腰錆碗で、内面が灰釉、外面が鉄釉後に口縁部に灰釉がかけられている。69は瀬戸・美濃及び信楽産の丸腰碗で、灰釉がかけられている。68・69は18世紀後半～19世紀初頭のものになる。70は常滑産の焼き締めの甕口縁部で、18世紀後半～19世紀初頭のものになる。71は羽付鍋で、口縁端部が内面下方に拡張する。

## 9 SD14

72は瀬戸・美濃産の丸碗高台部で、灰釉が施されている。高台部内面には弧状の沈線がみられる。時期は18世紀後半。73は口縁端部が上方に延びるまたは口縁部外面が須恵器の杯身のように外の拡張するもので、体部の角度から焙烙と考えられる。内面にはハケ調整がなされる。時期は18世紀以降のものになる。44は口縁部が内湾し、端部で横位に拡張される羽付鍋で、内面にイタナデがなされている。

## 10 SD17

75は鉄釉が施される瀬戸・美濃産の皿で、大窯第2～3段階になる。76は志野釉が施される笠原鉢で、内面に鉄絵が描かれている。時期は17世紀代になる。77は錆釉が施される常滑産の壺で、体部内面には、鉄分のような固い付着物がみられる。時期は17世紀後半から18世紀中葉になる。

## 11 SK16

78はヨコナデ調整された土師質の皿で、全体にスス・有機物が付着している。

## 12 SK32

79・80とも瀬戸・美濃産で、79は灰釉が施された花入、80は片口鉢になる。両者とも、時期は79が18世紀後半～19世紀初頭、80が18世紀中葉から後半になる。

## 13 SK40

81は口縁部が内湾する内耳鍋で、体部内面はハケ調整がなされる。また全体にスス・有機物が付着している。

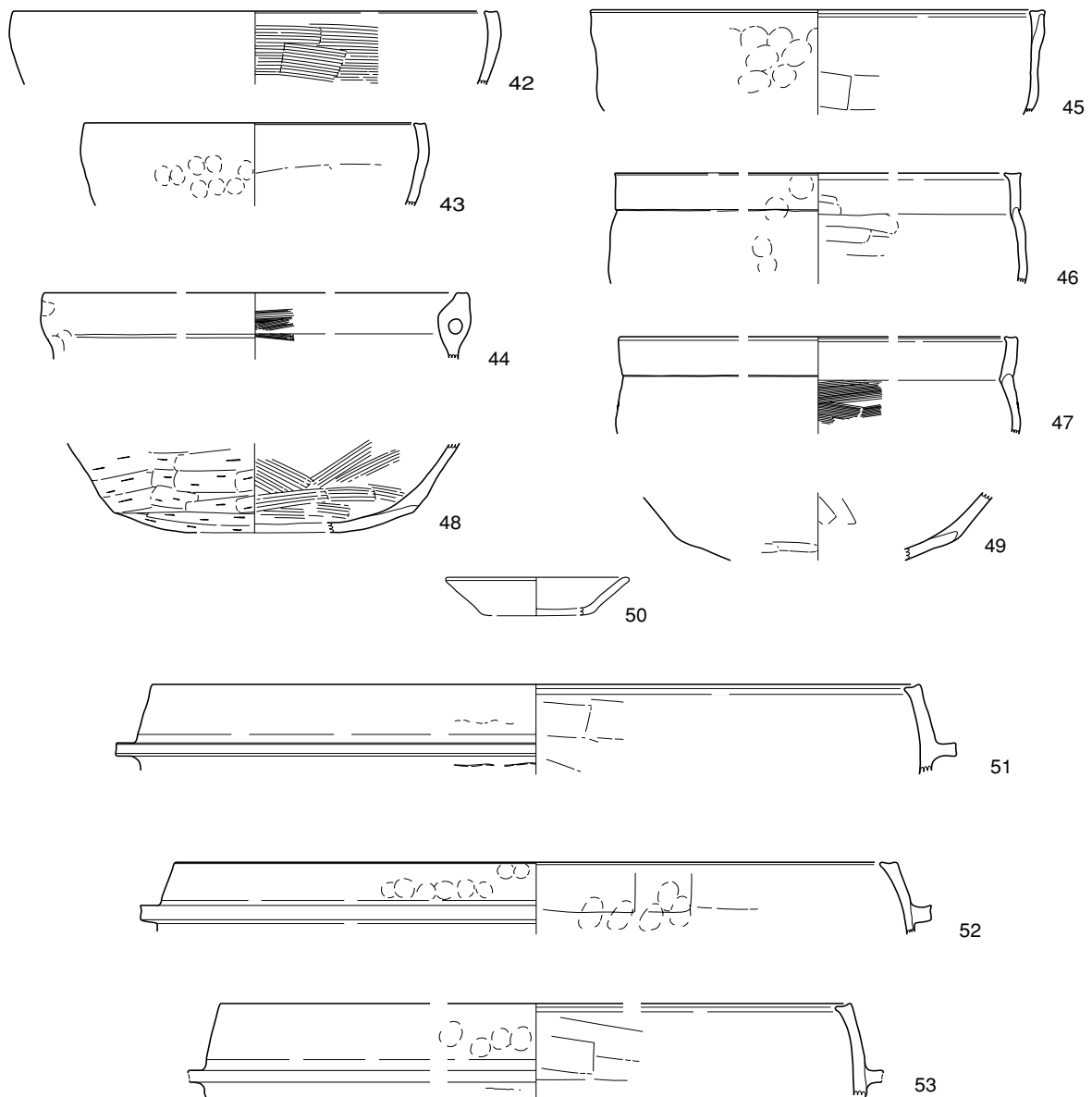
## 14 SX02

82はく字状に折れる口縁部をもつ内耳鍋になる。

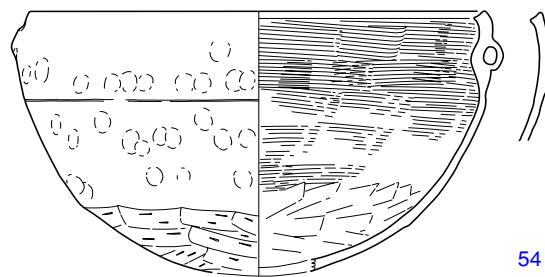
## 15 SX05

83は第6～7型式の山茶碗の高台部、84は肥前産の碗で、呉須により菊花・二重網手・渦文が描かれる。時期は17世紀末～18世紀前半になる。

東端城跡



SX01 (42~53)

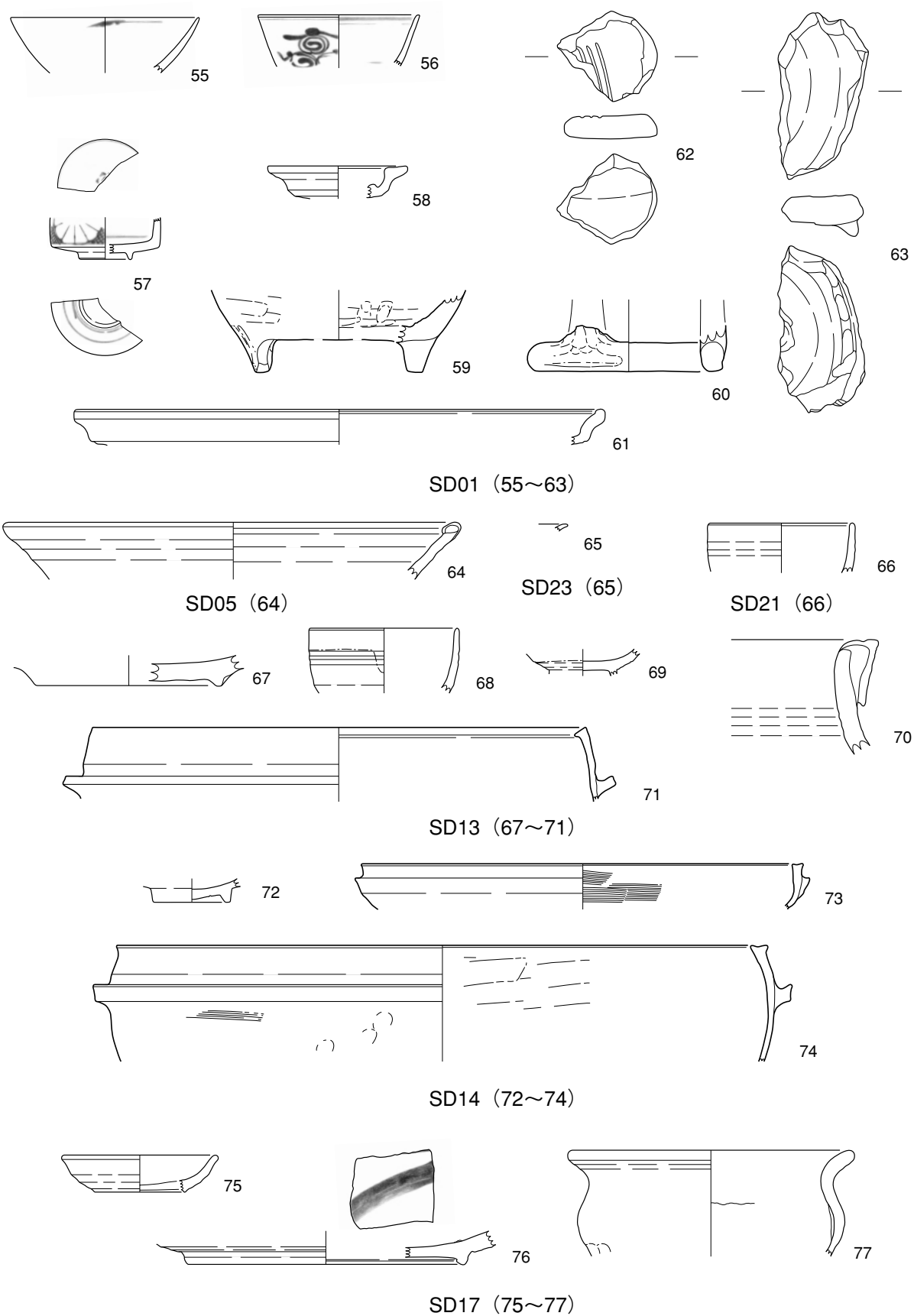


SD22 (54)

第13図 SX01 (2)・SD22 出土土器 (1) (S=1/4)

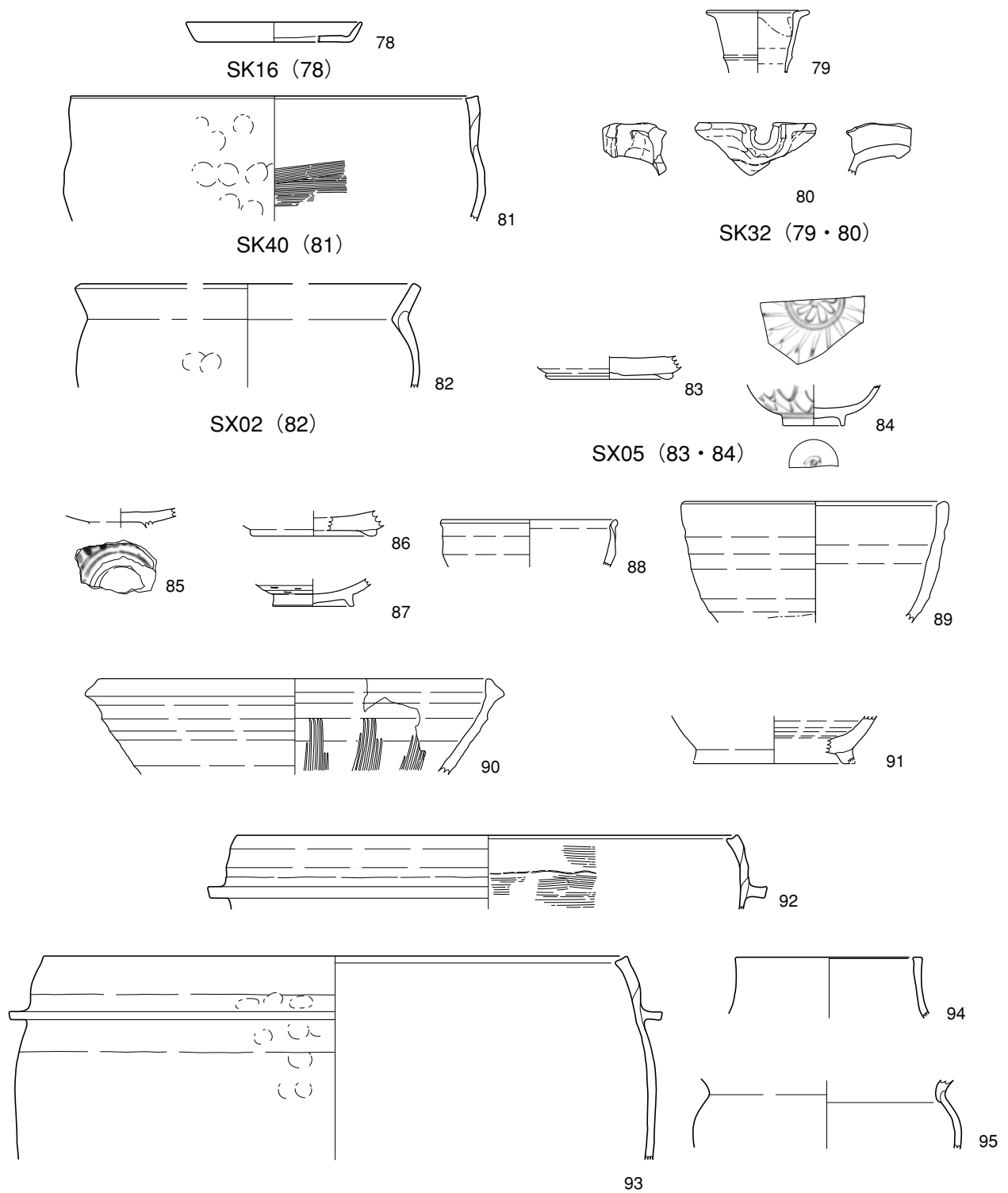


## 東端城跡



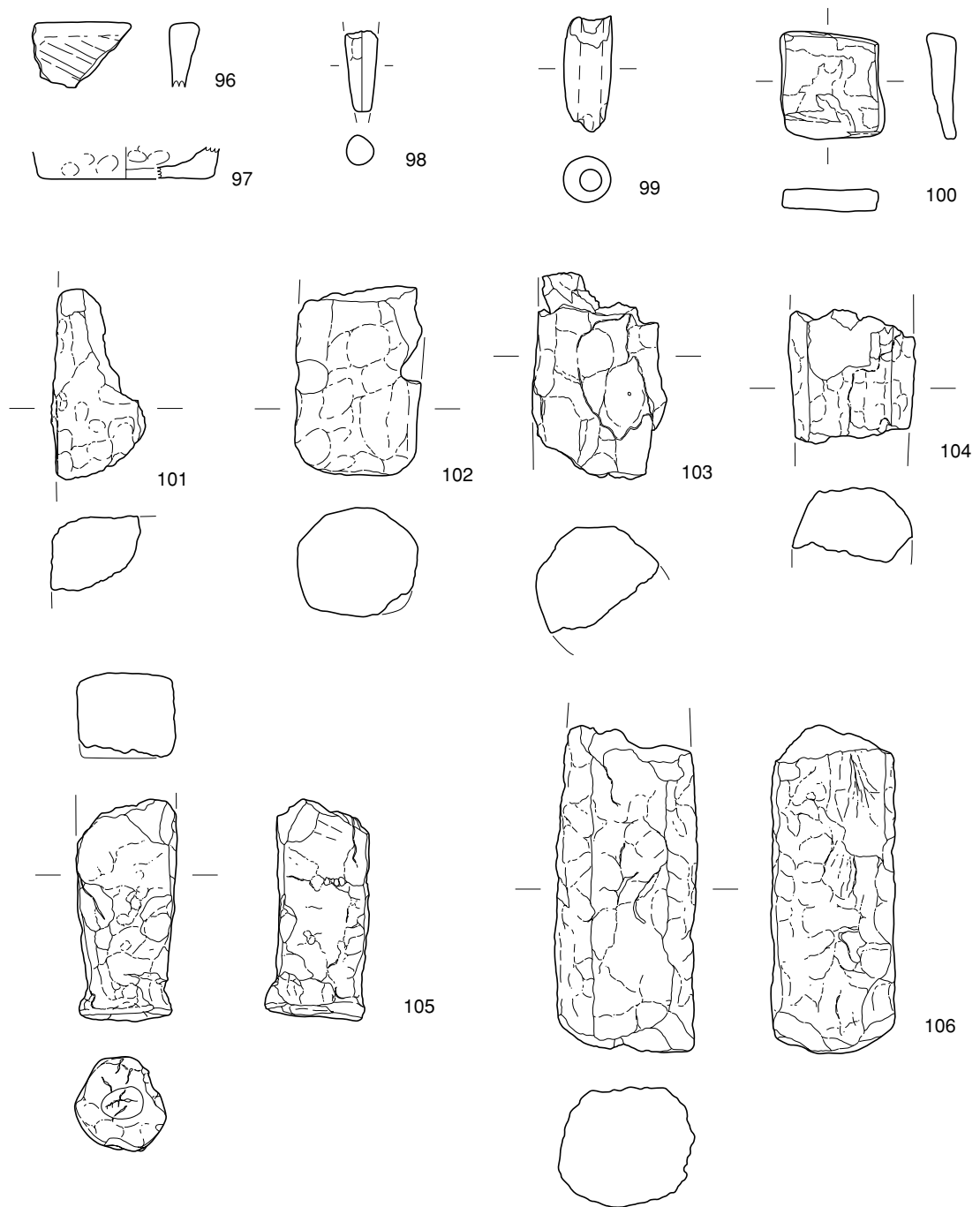
第 14 図 遺構内出土土器 (1) (S=1/4)

東端城跡



第15図 遺構内(2)・遺構外(1)出土土器 (S=1/4)

## 東端城跡



第16図 遺構外(2)出土土器・土製品 (S=96は1/2、他は1/4)

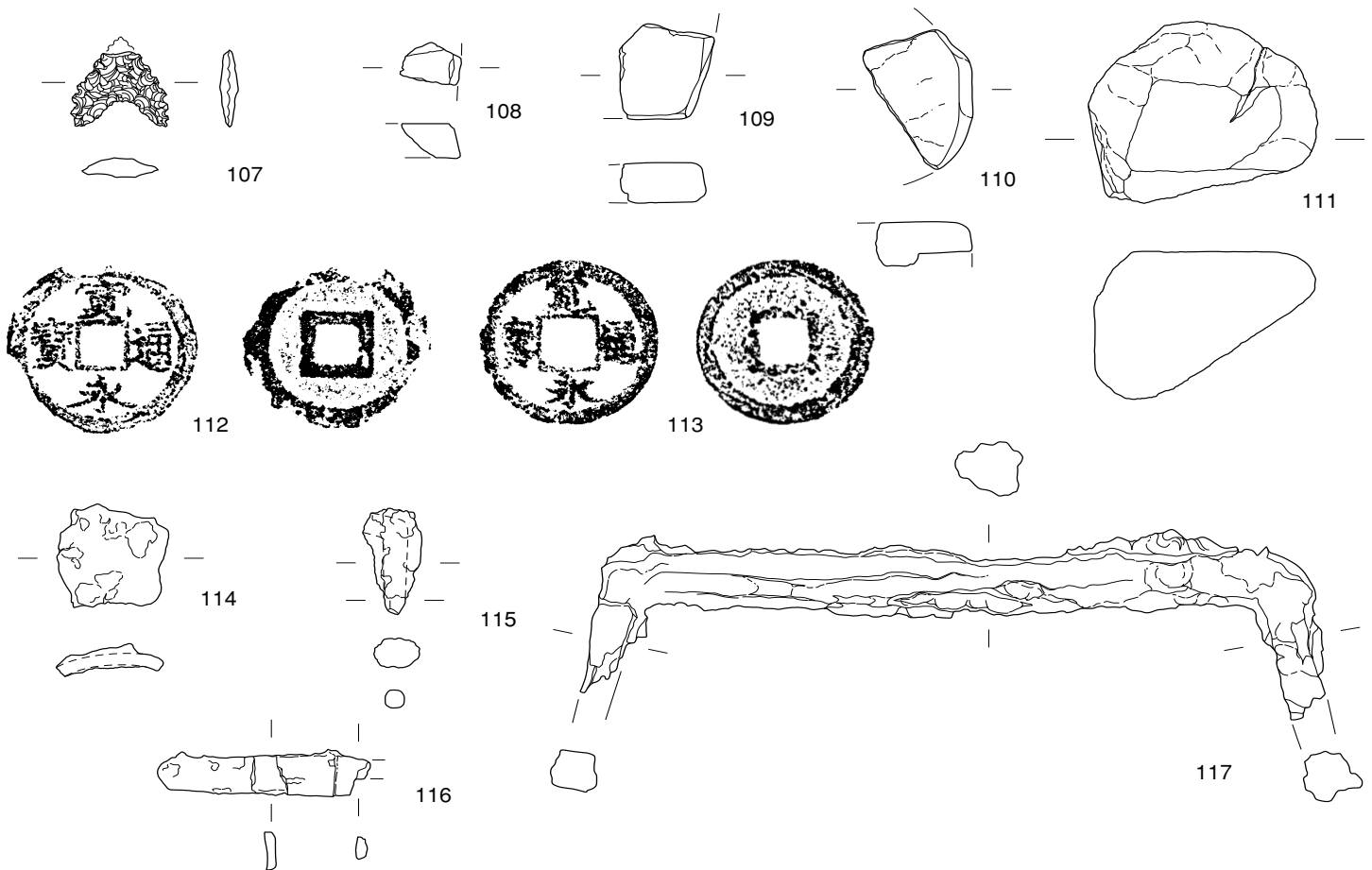
## 第2節 遺構外出土の遺物

### 1 陶磁器

86は第6～7型式の山茶碗の高台部になる。85～91は瀬戸・美濃産である。85は白化粧された碗で、鉄絵が描かれている。時期は19世紀中頃になる。87は体部下半にヘラケズリ調整された丸碗で、鉄釉がかけられている。時期は18世紀中葉～後半になる。88は鉄釉が施された古瀬戸末期の碗になる。89は18世紀後半の捏鉢で、内外面とも灰釉が施されている。90は錆釉が施された大窯第1～2段階の搦鉢で、口縁端部は上下に拡張されている。91は大窯期の鉢の高台部で、錆釉が施されている。

### 2 土師質鍋・釜

92・93は羽付鍋になる。93の体部は、わずかに内湾しながら直線的に長く延びている。94は羽付釜、95は内耳鍋になる。



第17図 石製品・金属製品 (S=108・112・113は1/1、114～117は1/2、他は1/4)

## 東端城跡

## 3 その他の土器

96・97は粗い砂粒を多く含むにぶい橙色をした土器片で、縄文土器の可能性があると考えられた。96は外面にわずかに条痕状の沈線が観察できる口縁部で、やや肥厚して丸く収束している。97はユビ押圧された底部となる。98は知多式4類になる製塩土器の脚部で、橙色を呈し、ユビ押圧・ナデ調整されている。99は土師質の土錘で、両端面には使用時についたと思われる欠損痕がみられる。100は橙色の土師質土器片を加工したもので、側辺に研磨がなされている。

## 第3節 土製品・石製品・金属製品

## 1 支脚状土製品

手捏ね状に整形された土製品で、ユビ押圧により簡単に調整されている。断面形は四角及び多角形をなし、全体に強い火を受けており、やや脆くなっている。長径を計測できるものは出土しなかったが、短径は6～8cmを測る。101はSD16の2層から、102は3層から、103はSX01の貝層から、104はSD14から、他は包含層から出土している。102・106は端部で、丸く収束しているが、同じく端部となる105は平坦面をもち、中央に凹みがみられる。また断面形も105のみ四角形となり、今回出土したものの中では異質なものとなる。

## 2 石製品

107は黒曜石製の凹基の石鏃で、先端部が欠損している。108～111は砥石で、108～110は砂岩製、111は花崗岩製である。

## 3 金属製品

112・113は表採された銭貨で、「寛永通宝」になる。114～117は鉄器で、115は釘、116は刀子、117は鋸となり、114は不明である。

## 第4章 自然科学分析

### 第1節 東端城跡 SX01 出土の貝類

黒澤 一男（パレオ・ラボ）

#### 1. はじめに

東端城跡の発掘調査において周溝から多量の貝殻が検出された。そこから採取された土壌試料を水洗し、貝殻の拾い出しを行なった。拾い出しの際、その他の遺物についても確認を行ったが、獣骨や魚骨などの骨類は検出されなかった。拾い出された貝類について分類・同定を行い、出土貝類リストを表1に示し、以下に説明する。

#### 2. 貝類

今回分析した試料は10,906点であり、その内容を表2に示した。アサリが最も多く出土し、ウミナナ、イボウミナナ、マガキ、オキシジミ、シオフキガイが次いで出土する特徴を持つ。以下に主要な分類群について説明する。なお、殻長や殻高のデータは、アサリについては計測可能な試料すべてについて計測し、そのほかの試料は任意に選び出し、計測した結果である。また、個体数については、二枚貝は殻頂の残存する個体を、巻貝は芯が2巻以上残存する個体をカウントした。

##### アサリ・オキシジミ（マルスダレガイ科）

アサリは出土した貝類の中でもっとも多く、全体の84.6%を占める。それらの殻長値は15～37mm程度、平均値は1ベルトで24.0mm、2ベルトで24.1mmとなる。殻長20～27.5mmの個体が多く、アサリ全体の約68%を占め、比較的大きなサイズのアサリである。オキシジミは全体の1.1%で、殻長は28～48mm程度、40mm前後の殻長をもつ個体が多い。

アサリは、日本周辺の潮間帯から水深約10mの砂礫泥底に生息し、比較的容易に採取することができることから多くの遺跡で比較的良好に産出し、一般的な食用の貝類のひとつである。オキシジミは、房総半島以南の沿岸域に分布し、潮間帯から水深20m前後の砂泥底に生息する。

##### ウミナナ・イボウミナナ（ウミナナ科）

ウミナナは貝類全体の4.1%となり、殻高は14～28mm程度、平均20.6mmとなる。イボウミナナは全体の4.3%となり、アサリに次いで産出をしている。それらの殻高は19～29mm程度、平均24.4mmとなる。

ウミナナは、日本各地に分布し、内湾の干潟域に群生している。イボウミナナは日本各地に分布し、内湾の泥底に群生している。



## 東端城跡

表 1 東端城跡の出土貝類種名

## 軟体動物 Phylum Mollusca

## a. 腹足綱

## Class Gastropoda

|   |   |        |                                     |
|---|---|--------|-------------------------------------|
| 1 | . | イボキサゴ  | Umbonium moniliferum (LAMARCK)      |
| 2 | . | スガイ    | Lunella coronata coreensis (RECLUZ) |
| 3 | . | ウミニナ   | Batillaria multififormis (Lischke)  |
| 4 | . | イボウミニナ | Batillaria zonalis (Bruguiere)      |
| 5 | . | ヘナタリガイ | Cerithideopsilla cingulata (Gmelin) |
| 6 | . | アカニシ   | Rapana thomasiona CROSSE            |
| 7 | . | バイ     | Babyronia japonica (REEVE)          |
| 8 | . | コロモガイ科 | Cancellariidae                      |

## b. 斧足綱

## Class Pelecypoda

|    |   |            |                                          |
|----|---|------------|------------------------------------------|
| 1  | . | ハイガイ       | Tegillarca granosa (Linnaeus)            |
| 2  | . | サルボウ (モガイ) | Scapharca subcrenata (LISCHKE)           |
| 3  | . | アカガイ       | Scapharca broughtonii (SCHRENCK)         |
| 4  | . | フネガイ類      | Arcidae                                  |
| 5  | . | ナミマガシワ     | Anomia chinensis Philippi                |
| 6  | . | マガキ        | Crassostrea gigas (Thunberg)             |
| 7  | . | カキ類        | Ostreidae                                |
| 8  | . | ハマグリ       | Meretrix lusoria (ROUDING)               |
| 9  | . | オキシジミ      | Cyclina sinensis (Gmelin)                |
| 10 | . | アサリ        | Ruditapes philippinarum (Adams et Reeve) |
| 11 | . | シオフキ       | Mactra quadrangularis Deshayes           |
| 12 | . | マテガイ科      | Solenidae                                |
| 13 | . | シジミ        | Corbicula                                |

## マガキ

マガキは出土した貝類の3.0%となる。また破片化したものも多く含まれている。

マガキの分布域は日本全体に広がっており、潮間帯の岩礁に固着するか、砂礫底に密着してカキ礁をつくり生息している。アサリやハマグリと同様で多くの遺跡から産出する一般的な食用貝類である。

## シオフキ

シオフキは1.2%となり、本遺跡ではハマグリに次いで多く出土する。その殻長値は、24～38mm程度で、30mm前後が比較的多く出土している。

その分布域は、宮城県以南の沿岸域で、潮間帯～水深約20mの砂泥底に生息している。比較的一般的な食用貝類のひとつである。

表2 東端城跡における貝類種出土量

|                                                     |   | II AHB01 SX01 |      | Total |
|-----------------------------------------------------|---|---------------|------|-------|
|                                                     |   | 1ベルト          | 2ベルト |       |
| アサリ <i>Ruditapes philippinarum</i> (Adams et Reeve) | L | 2948          | 1730 | 4678  |
|                                                     | R | 2794          | 2753 | 4547  |
| オキシジミ <i>Cyclina sinensis</i> (Gmelin)              | L | 30            | 28   | 58    |
|                                                     | R | 37            | 29   | 66    |
| マシジミ <i>Corbicula leana</i> PRIME                   | L | 1             |      | 1     |
|                                                     | R | 3             | 2    | 5     |
| ハマグリ <i>Meretrix lusoria</i> (Rouding)              | L | 4             | 10   | 14    |
|                                                     | R | 7             | 8    | 15    |
| ナミマガシワ <i>Anomia chinensis</i> Philippi             | L |               | 4    | 4     |
| マガキ <i>Crassostrea gigas</i> (Thunberg)             | L | 52            | 128  | 180   |
|                                                     | R | 39            | 110  | 149   |
| カキ類                                                 |   | Fr            | Fr   |       |
| サルボウガイ <i>Scapharca subcrenata</i> (Lischke)        | L | 1             | 2    | 3     |
|                                                     | R |               | 2    | 2     |
| アカガイ <i>Anadara broughtonii</i> (Schrenck)          | L | 1             | 1    | 2     |
| ハイガイ <i>Tegillarca granosa</i> (Linnaeus)           | L | 2             |      | 2     |
|                                                     | R | 1             | 2    | 3     |
| シオフキガイ <i>Mactra quadrangularis</i> Deshayes        | L | 32            | 29   | 61    |
|                                                     | R | 37            | 35   | 72    |
| フネガイ科 <i>Arcidae</i>                                |   | Fr            | Fr   |       |
| マテガイ科 <i>Solenidae</i>                              |   | 1             |      | 1     |
| ウミニナ <i>Batillaria multiformis</i> (Lischke)        |   | 247           | 202  | 449   |
| イボウミニナ <i>Batillaria zonalis</i> (Bruguere)         |   | 244           | 228  | 472   |
| ヘナタリガイ <i>Cerithideopsis cingulata</i> (Gmelin)     |   | 54            | 37   | 91    |
| アカニシ <i>Rapana thomasiana</i> CROSSE                |   | 3             | Fr   | 3     |
| コロモガイ科 <i>Cancellariidae</i>                        |   | 1             |      | 1     |
| イボキサゴ <i>Umbonium moniliferum</i> (LAMARCK)         |   | 5             | 6    | 11    |
| スガイ <i>Lunella coronata coreensis</i> (RECLUZ)      | 殻 | 2             | 6    | 8     |
|                                                     | 蓋 | 1             | 2    | 3     |
| バイ <i>Babyronia japonica</i> (REEVE)                |   | 1             | 2    | 3     |
| 巻貝(種不明)                                             |   | Fr            | 2    | 3     |
| 合計                                                  |   | 6548          | 4359 | 10906 |

Fr.: 破片

### 3. まとめ

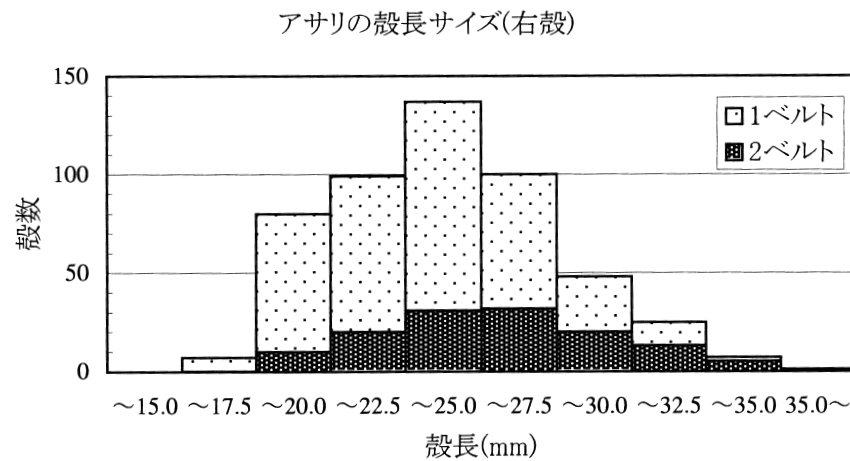
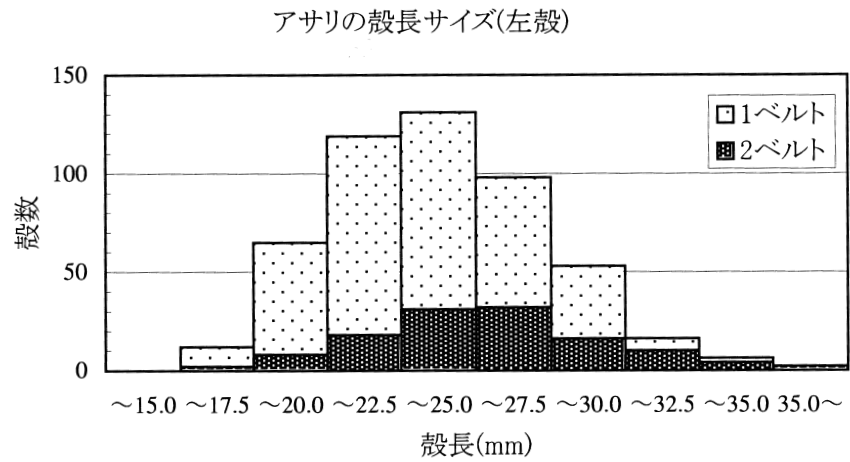
東端城跡の貝類を検討した結果を以下にまとめる。

アサリが大半を占め、それ以外の貝類も一般的な食用貝類（カキなど）のみが見られた。城跡の周溝であることから貴重な食材（アワビ類やサザエなど）が含まれると予想されたが、そのような食材は確認できなかった。また、哺乳類や鳥類、魚類などの骨類も確認できなかった。逆にウミニナやイボウミニナのように食用とは考えにくい貝類が多く産出した。それらのことを考慮すると食材を加工した後のものを捨てているという状況ではなく、採取され持ち込まれた貝類を食材と選別することにより出た不要なものを捨てていたとも考えられる。

### 引用・参考文献

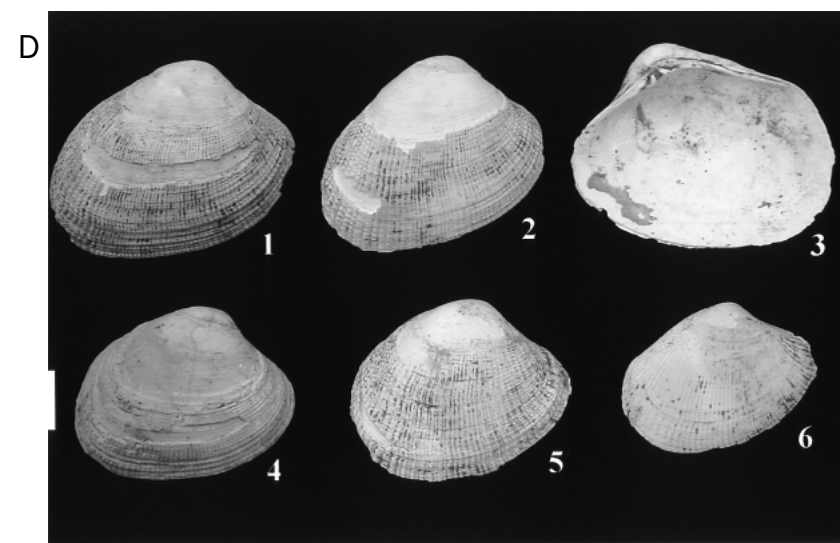
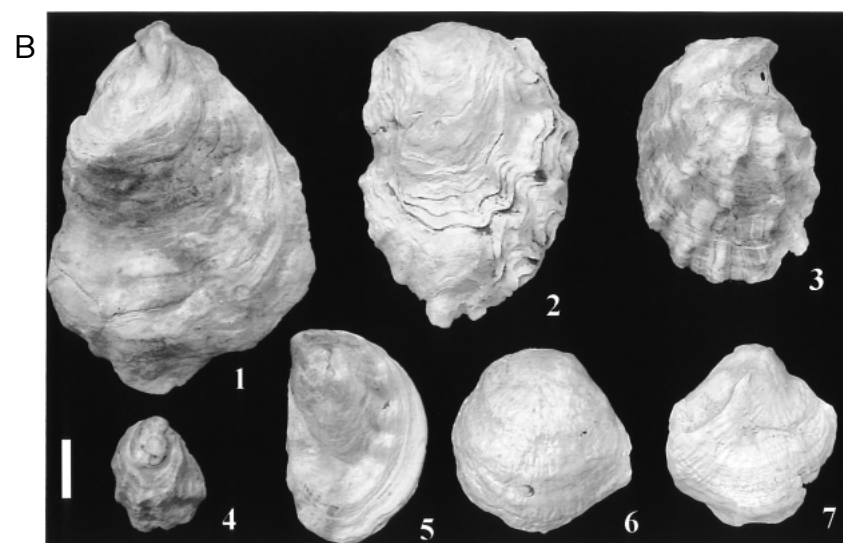
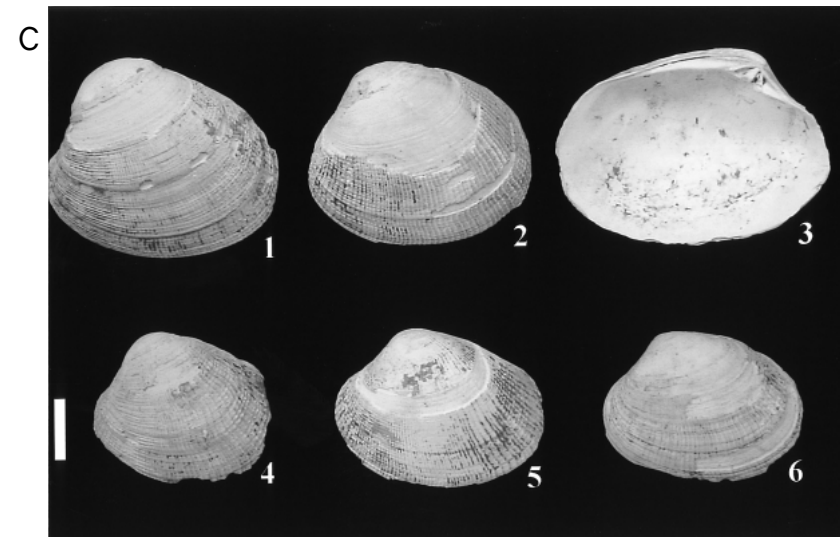
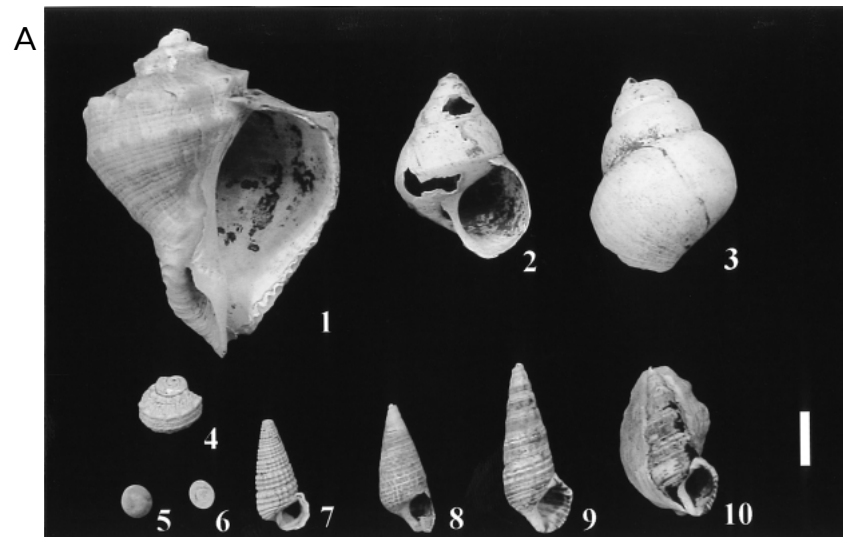
吉良哲明(1954)「原色日本貝類図鑑（増補改訂版）」、学習研究社、pp.240.

## 東端城跡



|         | アサリ(左殻) |      |      | アサリ(右殻) |      |      |
|---------|---------|------|------|---------|------|------|
|         | 1ベルト    | 2ベルト | 合計   | 1ベルト    | 2ベルト | 合計   |
| 計測個数    | 379     | 123  | 502  | 372     | 132  | 504  |
| 最小値(mm) | 15.5    | 17   | 15.5 | 16      | 18   | 16   |
| 最大値(mm) | 35      | 37   | 37   | 33.5    | 36   | 36   |
| 平均値(mm) | 23.5    | 25.6 | 24.0 | 23.5    | 25.7 | 24.1 |

第 18 図 東端城跡におけるアサリの殻長サイズ



A

1.アカニシ  
7.ヘナタリ2・3.バイ  
8.ウミニナ4～6.スガイ(殻と蓋)  
9・10.イボウミニナ

B

1～5.マガキ

6・7.ナミマガシワ

C

1～6.アサリ(左殻)

D

1～6.アサリ(右殻)

写真1 出土貝類

\*スケールはすべて1cm

## 第5章 まとめ

### 1 城館以前

東端城跡では確実に15世紀以前に遡る遺構は確認されていない。ただ、縄文土器と思われる粗い砂粒を含む土器片や石鏃、古代の灰釉陶器・製塩土器、13～14世紀の山茶碗片が少量出土している。第21図では縄文土器と思われる土器片の分布を示したが、土器片は16世紀以降の土器が集中する場所で出土しており、別の場所に生活域が存在するのか、城の整地とともに削平されてしまっているものと思われる。

### 2 城館の時代

今回の調査では、土塁の基本的な形状は後世に大きく改変されていないこと、西土塁の外側に堀（SD23）が確認できたことが成果としてあげられる。ただ、確実に遺構に伴う遺物が出土しておらず、城の構築時期については、依然として不明である。

土塁は、北西側にみられるようになだらかに繋がっていくわけではなく、西土塁は東へ、東土塁は南へと延びる様相を呈しており、城の南東部分では複雑な形態とすると予想される。また、貝の廃棄みられるSX01が所在する東土塁の西側は、SX01以前にもSD22が北西―南東方向に走っており、江戸期になっても井戸または水溜施設と考えられるSK32やそれに伴うと思われる溝が集中し、もともと低い場所であった可能性が指摘できる。さらに西土塁に付属する堀が西側で途切れることを考えると、この部分が第20図のように出入り口になる想定も可能である。ただ、明治24年の陸地測量部作製の1/20,000の地形測量図によると、南側に道路なく、北東の念空寺と東端城の間にのみ道が見られることから、主な出入り口である虎口は北東部で、調査区のある南西部は搦手になるとと思われる。

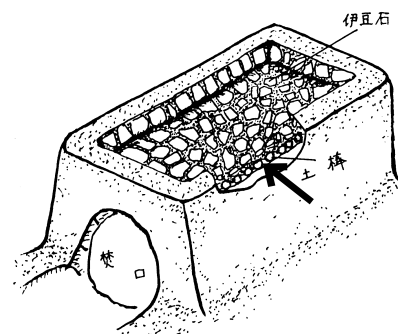
### 3 城館以後

城の南東辺に沿って走るSD16は、当初16世紀代と思われる鍋片が大量に出土し（表3）、城以前の遺構で城の構築に伴って埋められたと認識していたが、最下層より15・16の黄瀬戸鉢が出土しており鍋類も小破片が多いことから、城が営まれていた時期以降、おそらく17世紀中頃には、埋められたものであると結論づけた。溝の埋土には地山の斑土が多く、文献資料にみられる廃城時期である17世紀前葉以降に整地されたものと考えられる。このことは縄文土器片の分布でも述べたが、その他16世紀代の鍋類や支脚の分布や出土状況をみても、遺物は調査区東半の遺構部分にまんべんなく広がっており、窪地となっていた場所を平坦にした結果であると思われる。この傾向は貝廃棄が行われていたSX01についても同様で、窪地となっている場所に、短期間にアサリを主体とした貝類が廃棄されている。

上層・下層にわたって検出されたSD13・15・17などの溝や、井戸または水溜施設と考えられるSK32については、水周りのための一連の施設と考えられる。

### 4 支脚状土製品

現在のところ、支脚かどうかは不明で、土棒または支持棒とすべきものかもしれないが、本書では仮に「支脚状土製品」として呼称することとする。



第19図 塩竈想定図（三渡1971を改変）



## 東端城跡

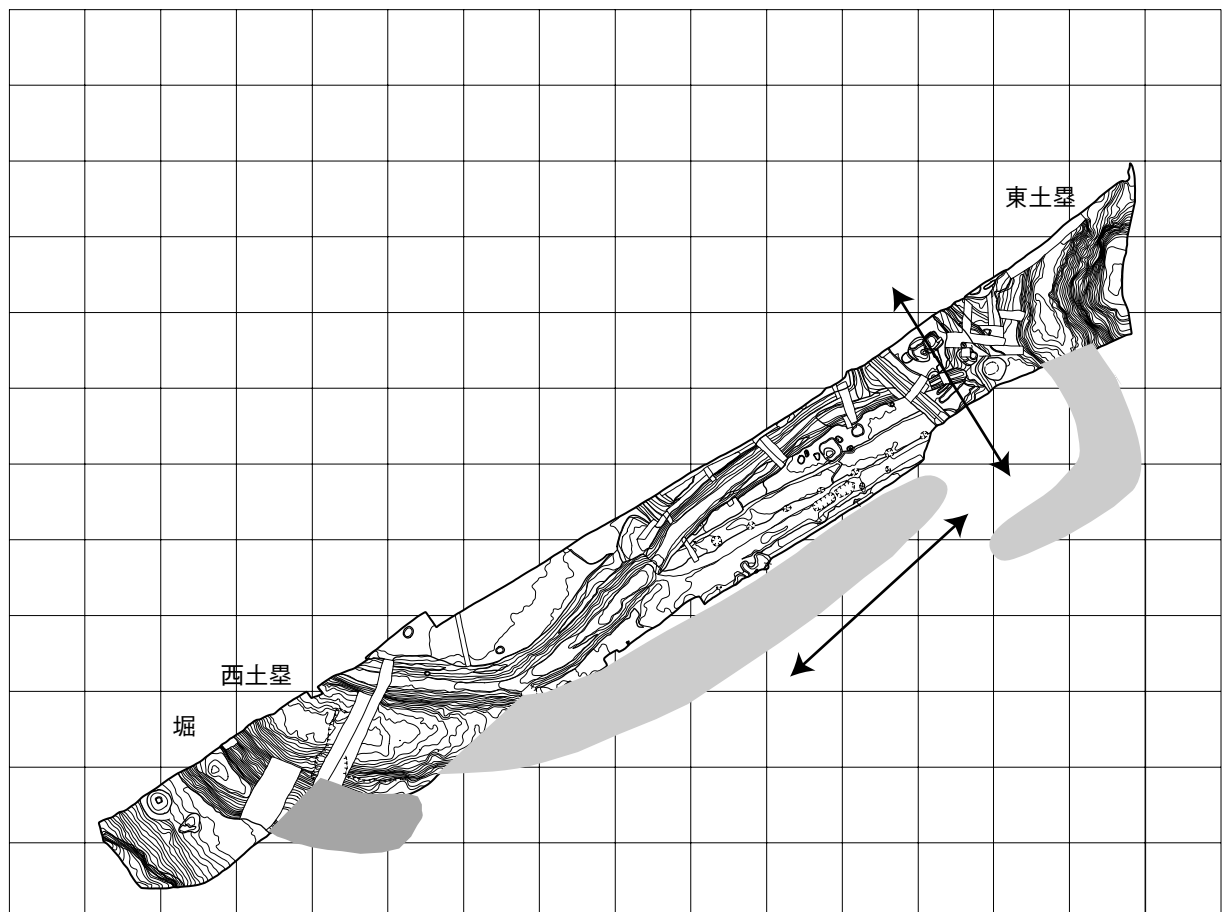
本遺跡で出土した支脚は、被熱していること、手捏ね状の簡単な整形で作られていること、厚みが6～8cmと太いことが特徴としてあげられる。全長がわかるものは出土していないが、かなり大型のものになると推定できる。この土製品に類似する遺物は、名古屋市南区星崎の南野町遺跡や大府市惣作遺跡、東浦町塩田遺跡、知多市浜田遺跡、常滑市狐塚遺跡、美浜町奥田製塩遺跡などで出土しており、製塩に関わりのあるものであるとされている。三渡俊一郎氏は、明治時代初期の石釜が焚口上に鉄棒で格子状に組み、その上に伊豆石などの扁平な石を敷き詰めて、海水を溜める槽を作り出すという構造をもっていたことから想定されて、第19図のような想像図を提示されている。それによると支脚状土製品は鉄棒の代わりに、横位に渡されると考えられており（矢印部分）、土棒と呼称されている。さらに三渡氏はこの土製品の時期を、付近より出土した製塩土器により、古代の遺物であるとされている。東端城出土資料については、古代の製塩土器も出土しているが、共伴している土器や出土状況をみると16世紀から17世紀のものになる可能性が高いと思われる。これは、本遺跡資料の断面形が四角または多角形を呈するのに対し、他の資料は円形であるという違いがあり、形態差による時期の相違であるとも考えられる。ただ、立松彰氏によると、確実に古代の製塩土器と共伴するという事例はなく、反対に古墳時代から古代にかけての製塩遺跡である東海市松崎遺跡では1点の出土もなく、古代のものではない可能性があるという指摘があり、時期については今後の検討課題となった。

## 参考文献

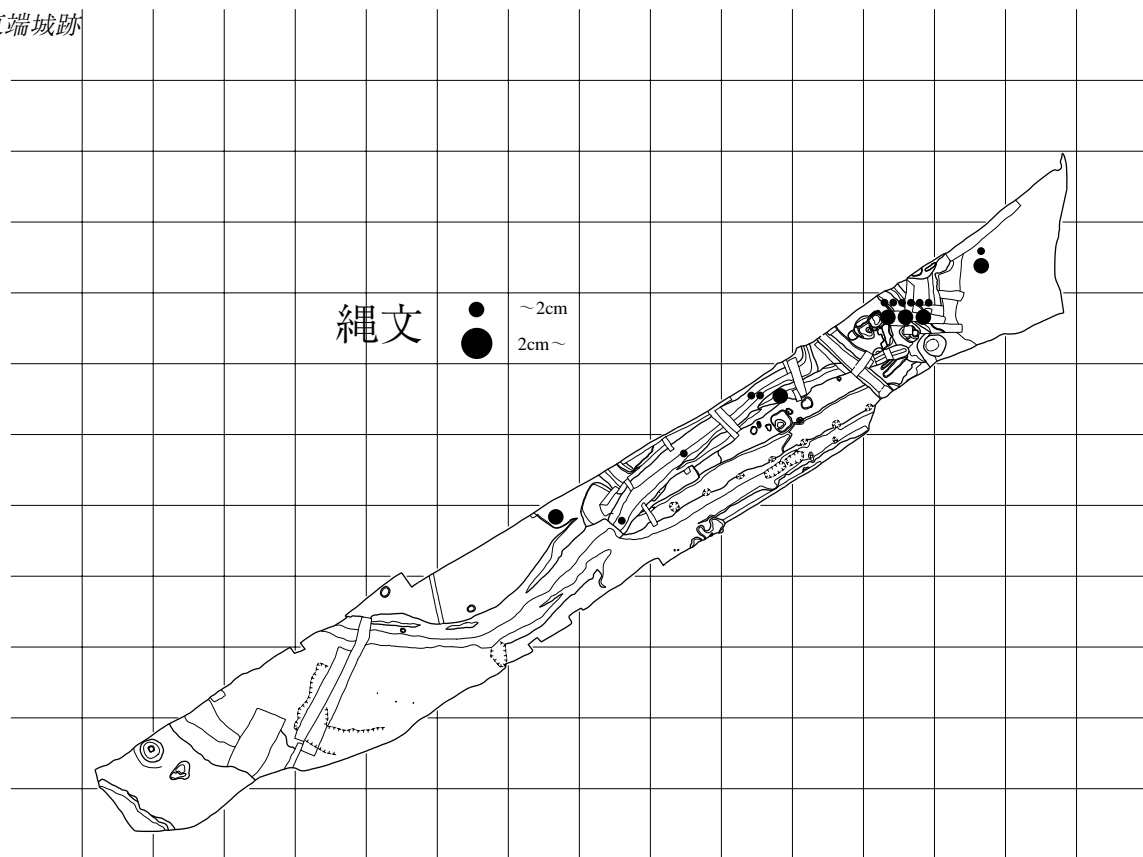
加賀宣勝 1972『続1 星崎の塩』

立松彰 1989「知多の土器製塩と「生道塩」」『知多古文化研究5』

三渡俊一郎編 1971『星崎の塩浜』

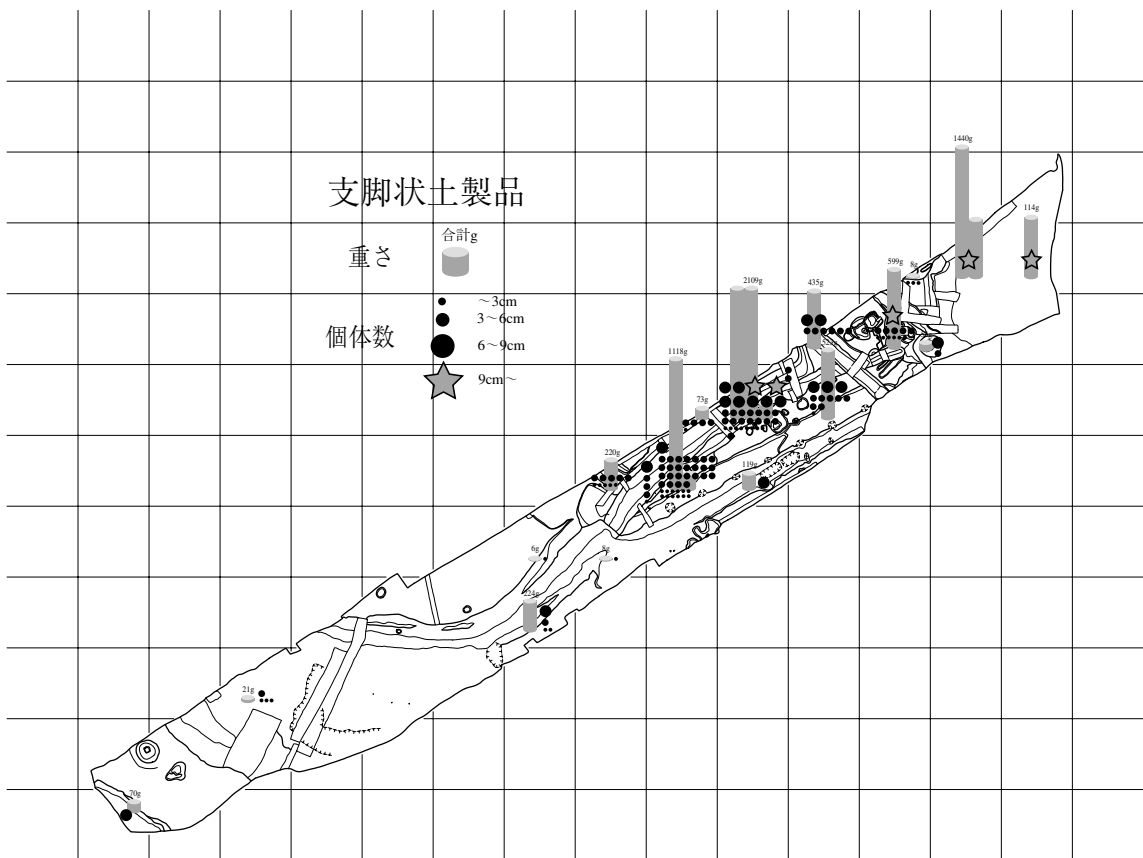


東端城跡



(個数はグリッドごとに集計している)

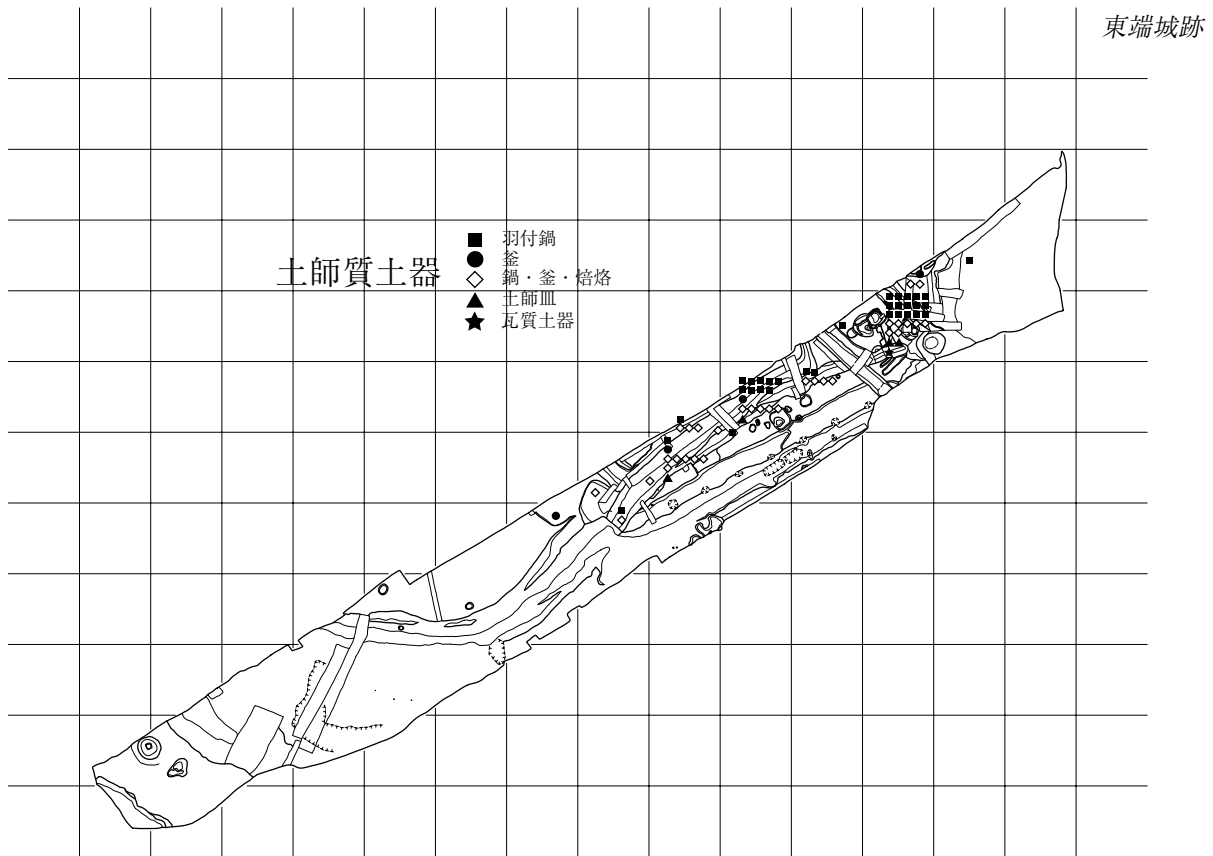
第21図 縄文土器分布図



(個数はグリッドごとに集計している)

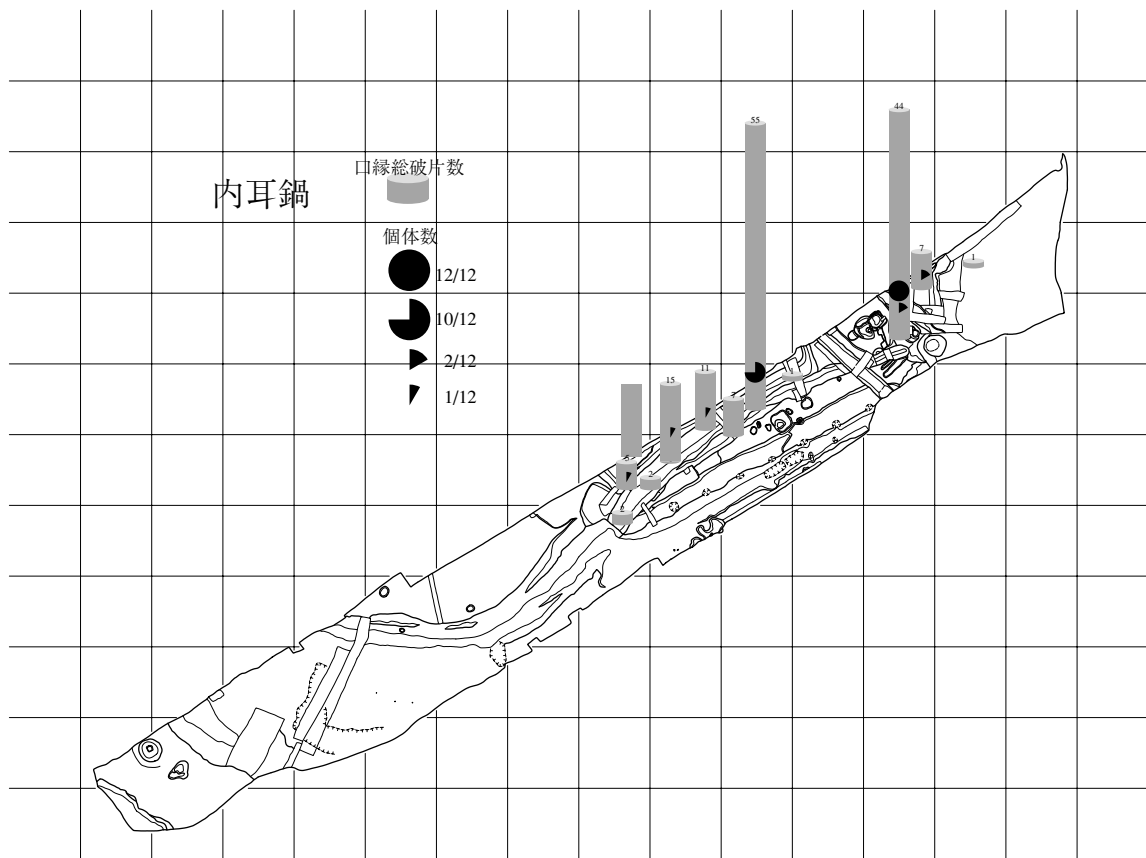
第22図 支脚状土製品分布図





(個数はグリッドごとに集計している)

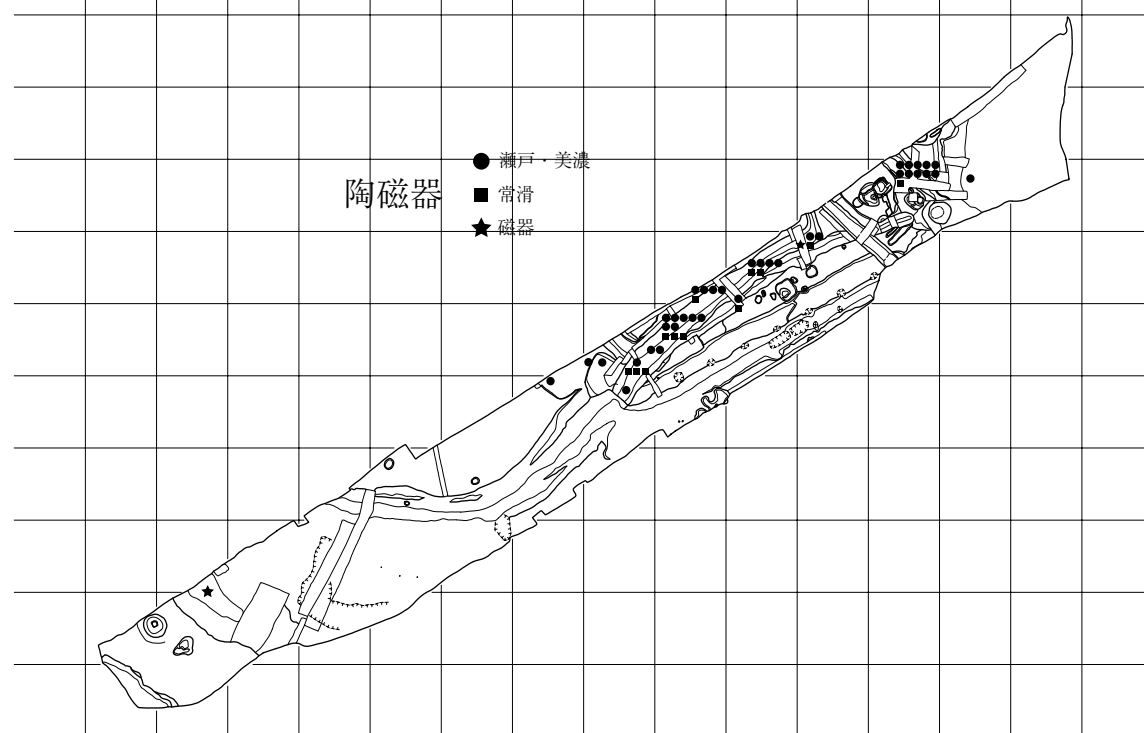
第23図 土師質土器分布図



(個数はグリッドごとに集計している)

第24図 内耳鍋分布図

東端城跡



(個数はグリッドごとに集計している)

第 25 図 陶磁器分布図

表 3 SD16・SX01 出土破片数

## SD16

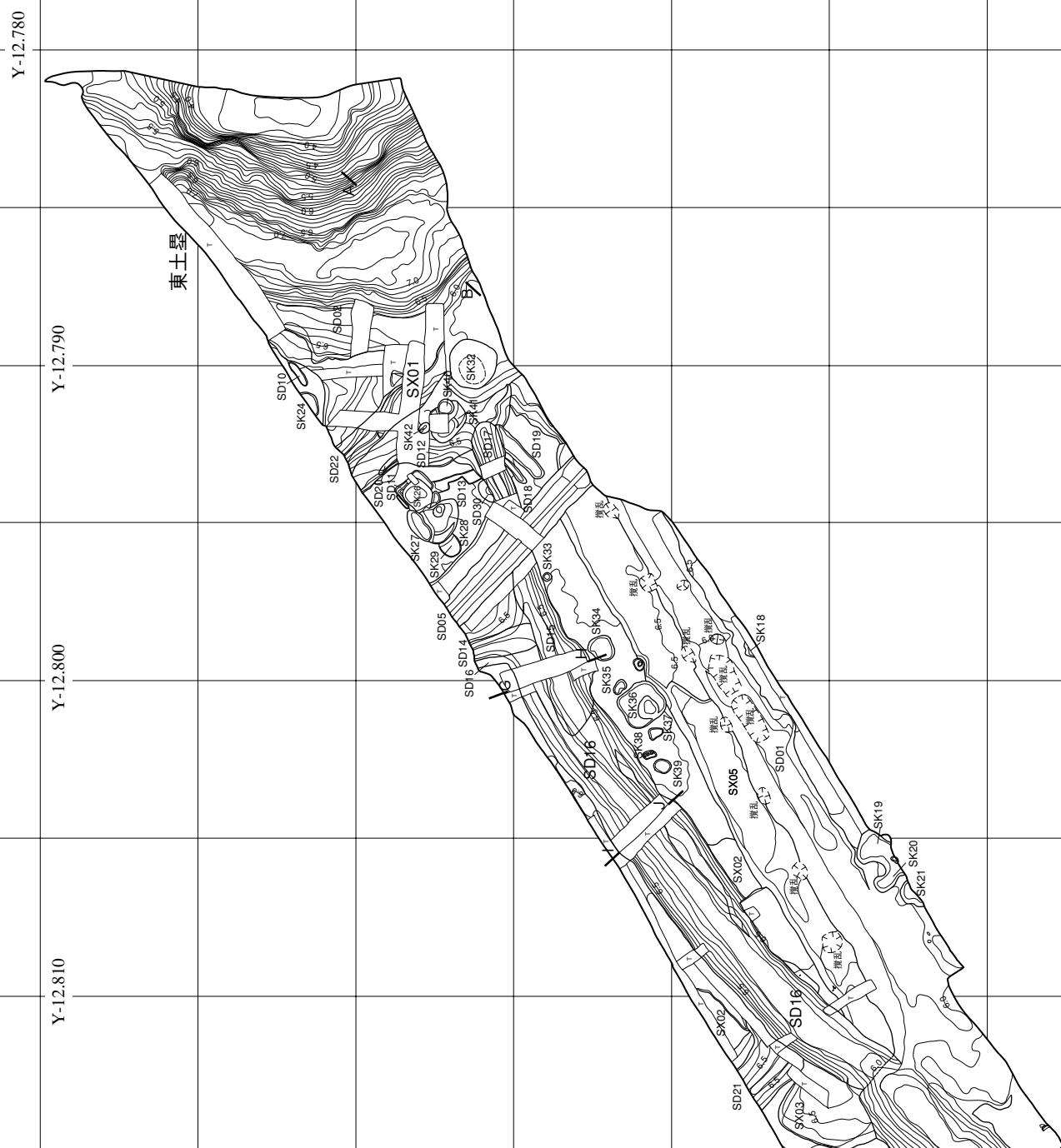
|        | 器 種    | 破片数 | 総破片数 |
|--------|--------|-----|------|
| 口<br>縁 | 釜      | 2   |      |
|        | 内耳鍋    | 88  |      |
|        | 鍋・釜・焙烙 | 20  |      |
|        | 土師皿    | 1   |      |
|        | 羽付鍋    | 12  | 123  |
| 破<br>片 | 鍋（脚部）  | 1   |      |
|        | 鍋・釜・焙烙 | 706 |      |
|        | 羽付鍋・釜  | 16  | 723  |
|        | 磁器     | 1   |      |
|        | 瀬戸・美濃  | 20  |      |
|        | 常滑     | 10  | 31   |
|        | 支脚状土製品 | 54  | 54   |

## SX01

|        | 器 種     | 破片数 | 総破片数 |
|--------|---------|-----|------|
| 口<br>縁 | 釜       | 1   |      |
|        | 瓦質土器    | 1   |      |
|        | 内耳鍋     | 50  |      |
|        | 鍋・釜・焙烙  | 9   |      |
|        | 土師皿     | 2   |      |
|        | 羽付鍋     | 15  | 78   |
| 破<br>片 | 内耳鍋（底部） | 2   |      |
|        | 鍋・釜・焙烙  | 442 |      |
|        | 羽付鍋・釜   | 2   | 446  |
|        | 不明      | 1   |      |
|        | 瀬戸・美濃   | 10  |      |
|        | 常滑      | 1   | 12   |
|        | 支脚状土製品  | 10  | 10   |

東端城跡

## 遺構図版 1



( S = 1 / 200)

東端城跡

遺構図版 2

Y-12.810

Y-12.820

Y-12.830

Y-12.840

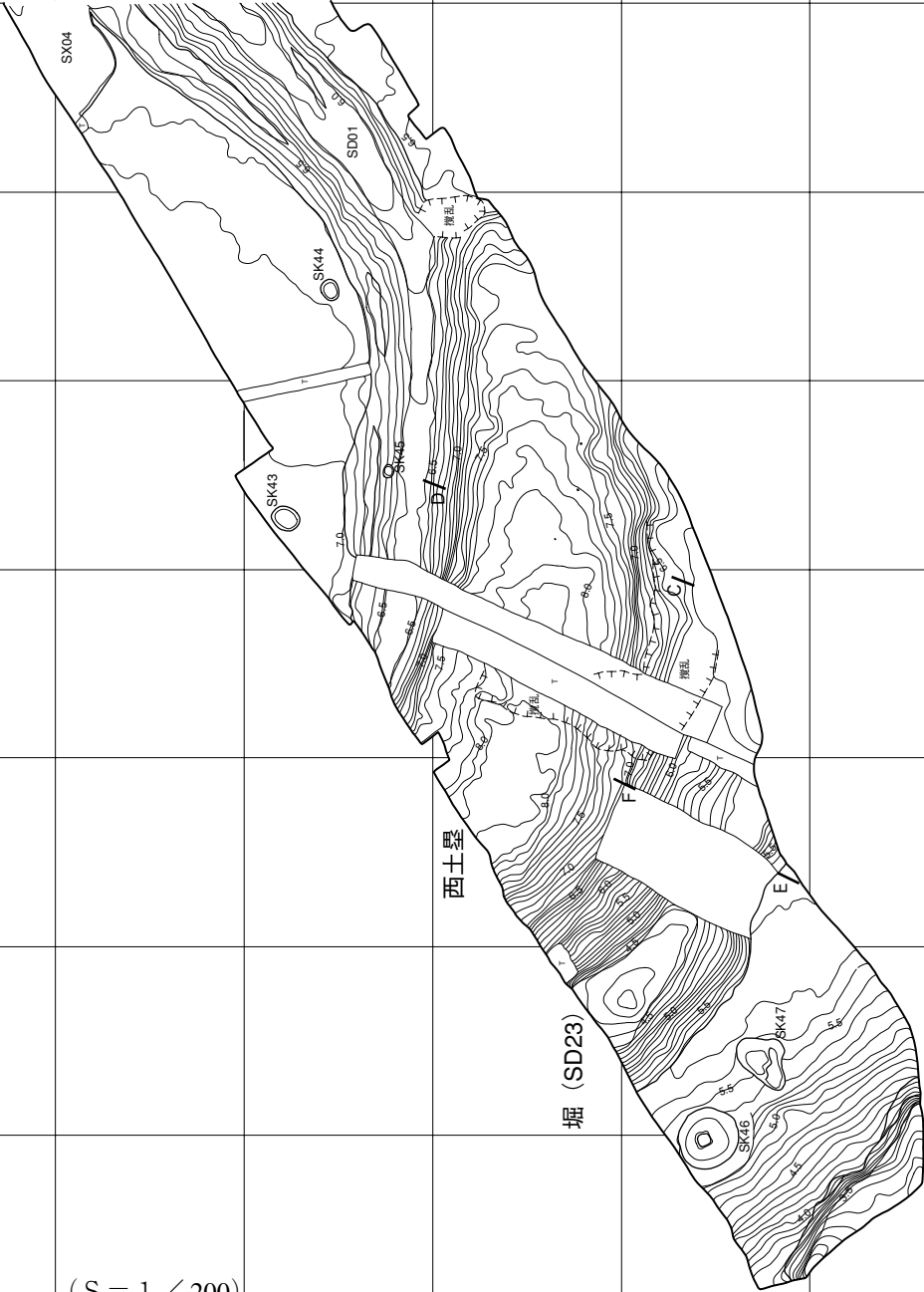
Y-12.850

X-122.190

X-122.200

X-122.210

X-122.220



(S = 1 / 200)



## 東端城跡

## 上段

西土塁・堀 (SD23)  
西壁セクション (南から)

## 中段左

堀 (SD23) 西壁セクション  
(南東から)

## 中段右

西土塁西壁セクション  
(東から)

## 下段左

東土塁A-Bセクション  
(西から)

## 下段右

SD16 I-Jセクション  
(西から)





## 東端城跡

## 写真図版 2



東端城跡空中写真

上段 南から

中段 北東から南西方向を望む

下段 北から南方向を望む

東端城跡空中写真

上段 南から

中段 南西から北東方向を望む

下段 南から北方向を望む



## 東端城跡



## 上段左

調査前風景・東土塁  
(北から)

## 上段右

調査前風景・西土塁  
(西から)

## 中段左

調査前風景・調査区  
(南西から)

## 中段右

調査前風景・郭内  
(南東から)

## 下段

調査区全景・北東  
(南西から)





## 東端城跡



上段

調査区全景・南西

(北東から)

中段左

西土塁付近

(北東から)

中段右

西土塁・SD01

(東から)

下段左

東土塁

(北から)

下段右

東土塁

(南西から)





- 上段  
堀 (SD23) ・ 中央部  
(西から)
- 中段左  
東土塁付近  
(北西から)
- 中段右  
SX01 付近  
(北から)
- 下段左  
東土塁  
(南から)
- 下段右  
SK32 断ち割り  
(北西から)





## 東端城跡



上段

SX01・SD22

(北から)

中段左

SX01 貝層検出状況

(南西から)

中段右

SX01・SD22

(北西から)

下段左

SD22 鍋 (54) 出土状態

(南から)

下段右

SD22 鍋 (54) 出土状態

(西から)





## 上段

西土塁C-Dセクション  
(東から)

## 中段左

西土塁・堀(SD23)西壁  
セクション (東から)

## 中段右

西土塁西壁セクション  
(東から)

## 下段左

西土塁・堀(SD23)西壁  
セクション (南から)

## 下段右

西土塁西壁セクション  
(東から)





## 東端城跡



上段左  
堀 (SD23) E-F セクション  
(南東から)

上段右  
堀 (SD23) の西・腰曲輪部分  
西壁セクション (南東から)

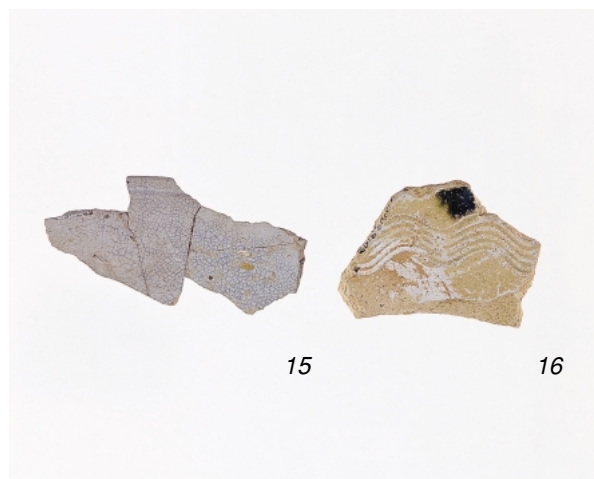
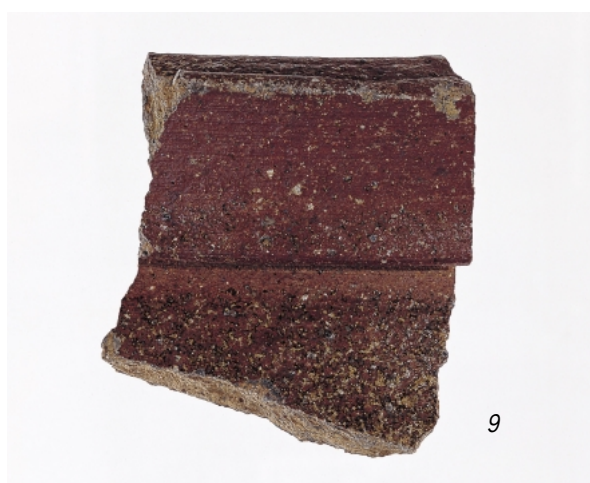
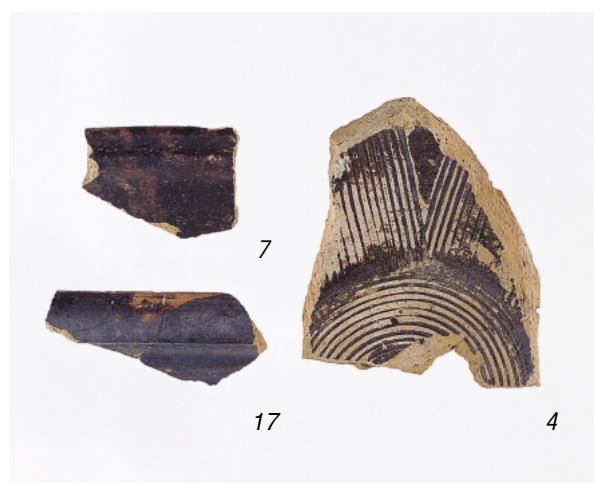
中段左  
SD16・SD14 西壁セクション  
(東から)

中段右  
SD16・SD15 G-H  
セクション (西から)

下段  
東土塁A-B セクション  
(北から)



## 東端城跡



## 東端城跡

写真  
図版  
10

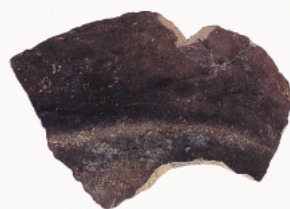
28



28



42



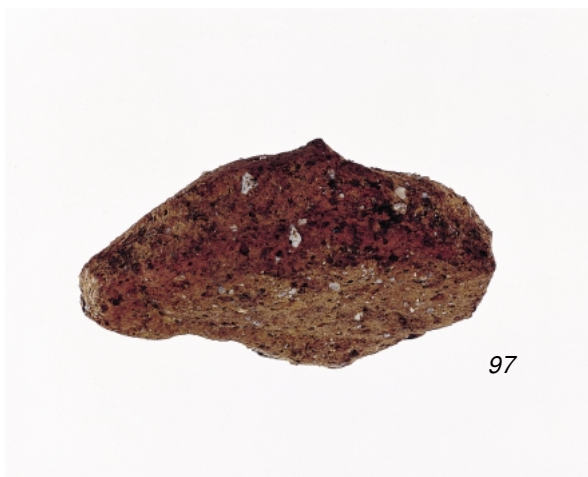
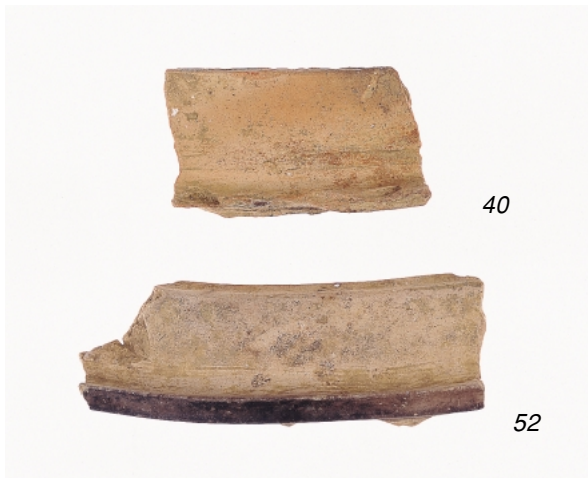
48



54



東端城跡



東端城跡

写真  
図版  
12

